

佐倉本データ・ベース 2006

利用にあたって

- 1、「佐倉本データ・ベース 2006」は、佐倉や佐倉にゆかりのある人が一文字でも出てくる小説・エッセイなどを、満開佐倉文庫館主亀田雄岳が編者となって作成したデータ・ベースです。なお、満開佐倉文庫はホームページ上だけに存在する電子図書館です。
- 2、このソフトは編者が資料整理のために作成したものです。読書をする上での参考としたり、佐倉市教育委員会が提唱している佐倉学を学ぶ上での参考にしていただければ幸いです。
- 3、佐倉本とは、佐倉や佐倉にゆかりのある人が一文字でも出てくる小説・エッセイ・漫画などで冊子となったものを個人的に称しているだけです。
- 4、「佐倉本データ・ベース 2006」のデータは、2003年7月までに編者が確認したものです。まだ漏れ落ちがありますので、随時更新をしていきます。

「佐倉本データ・ベース 2006」の編集

- 1、「佐倉本データ・ベース 2006」は、明治時代以降に描かれた作品を、その描かれた舞台となる時代別に掲載しています。印旛沼は、描かれた場所が佐倉市以外の作品でも掲載しています。また自費出版の本も掲載しています。
- 2、【 】内は、作品から佐倉や佐倉にゆかりのある人物が描かれた文章を一部分抽出したものです。紙面の関係から、その部分を限定して抽出したために話の流れが読めないものがあり、著者の意図するところの区切りではないかも知れませんがご了承ください。
- 3、*印は、年代や人物を特定するために筆者が加筆したものです。
- 4、小説は、書かれた内容が事実でないことがあります。ここでは、このような本に佐倉が書かれているという紹介であって、これを目安に読みたい本を手にとっていたら幸いです。
- 5、一つの作品でも、いくつかの出版社から発行されているものがありますが、ここではページを示すことから編者が管見することができた本の出版社を記しました。そのため、当初出版された出版社と違っているものがあります。
- 6、掲載人物の肩書きは、小説の文章を優先しました。
- 7、文章中のカラーについて。水色は著作名。桃色は佐倉、佐倉にゆかりのある人物、佐倉に関連のある部分。橙色は短歌、俳句を示します。

2005年11月30日 作成

「佐倉本データ・ベース 2006」表

時代区分	人物・地名	人物肩書	作家・作品	内容・備考
戦国時代	戦国時代を舞台として描いた作品			
	佐倉という文字が出てくる作品			確認していません
	印旛沼という文字が出てくる作品			確認していません
佐倉ゆかりの人が出てくる本				
戦国	長嶋茂雄	東京読売巨人終身名誉監督 *昭和・平成に再掲	志茂田景樹『戦国の長嶋巨人軍』実業之日本社	【ワーツと、相馬原演習場に雄叫びが轟く。迷彩色に身を包んだ歩兵が、敵陣地へ向かって駆ける。歩兵の群れのすぐ前を、90式戦車がキヤタピラをかみ砕きながら前進していく。なんと、ハッチを開いた砲塔から上半身を乗り出しているのは、ヘルメット姿の長嶋茂雄監督である】9頁 【「ここは、さっきまで俺たちがいた一九九五年じゃないです」「え、それはどういふことなんだ？」長嶋は目を瞬かせて聞いた。「一五六〇年、つまり永禄三年の五月十九日だ。ただし、これは陰暦で、我々が使っている太陽暦では六月下旬です。だから蒸し暑いんです」】20頁
戦国	千葉氏の家臣団	千葉氏の家臣団	田中悦子『伝記物語天正十八年の秋』	【「豊臣秀吉が島津を降服させて、九州全土を制圧したようだ。仙台の伊達も秀吉の前に屈服した。次はいよいよ小田原の北条の番だ。最後に北条を降服させれば、天下は豊臣のものになるのだ」「北条がそうやすやすと豊臣に頭をさげるものでしょうか」孝久は思慮深そうに、眼をきらきらさせて父を仰いだ。「そこだ。関東には北条支持の武将が多いから、北条もちよつとやそつとでは、豊臣に降服はすまいな」「佐倉の千葉氏は、どうされるのでしょね」父と】109頁
江戸時代を舞台として描いた作品				
佐倉という文字が出てくる作品				
江戸	佐倉		直木三十五『黄門廻国記』春陽文庫	【佐倉まで、なにとぞお供おせつけられとう存じ上げます】137頁
江戸	佐倉		松本清張『天保図録』中 朝日新聞社	【佐倉のような田舎に、そんな繁昌があるのかえ】48頁 【この辺の中心地は佐倉である。佐倉は堀田備中守の所領で五万石。その佐倉から西一里ばかりのところには臼井村がある。そこの百姓家の一間を借りて、近ごろ祈祷で売出した坊主がいた】261頁【お玉は佐倉の桔梗屋という田舎女郎屋の遊女だから】264頁 【堀田正睦にしても真田幸貫にしても彼の腹心】320頁 【佐倉の城下外にある弥勒という町の遊女が多い。女郎屋の楼主が工事場を当て込んでの商売であった】343頁 【いつもは佐倉のご城下におりますけど、今日は殿さまがお見えになるので、こちらに参ったのでございます】「佐倉の城下」にいるのか】下251頁
江戸	佐倉		徳田秋声『縮図』岩波書店	【松島も父が佐倉のご典医であり】68頁

江戸	佐倉	池波正太郎『鬼平犯科帳』文春文庫	岸井左馬之助 【左馬之助は、師の高杉銀平と同じ下総・佐倉に近い郷土の家の出】巻一60頁「本所・桜屋敷」 【この男、長谷川平蔵と同年の四十四歳で、平蔵とは若いころからの剣術友達。名を岸井左馬之助とって、父の代から下総・佐倉の浪人である】巻一153頁「浅草・御厩河岸」 【土地の郷土であり庄屋でもあった左馬之助の家】巻三218頁「駿州・宇津谷峠」 【下総・佐倉の郷土の二男に生れた岸井左馬之助だが】巻十五98頁「劍客医者」 高杉銀平 【高杉銀平と同じ下総・佐倉に近い郷土の家の出】巻一60頁「本所・桜屋敷」 【一刀流の剣客・高杉銀平は、下総・佐倉の出身で】巻十五38「赤い空」鎌太郎 【この男は、左馬之助と同じく下総の国・印旛郡・白井の生れて、鎌太郎という者である。土地の郷土であり庄屋でもあった左馬之助の家とちがい、鎌太郎は印旛沼のほとりの小百姓のせがれだが、二人は幼少のころから仲よして、年齢も同じ四十八歳になっているはずだ】巻三218頁「駿州・宇津谷峠」 吉兵衛 【男は〔佐倉の吉兵衛〕とって、これも徳次郎と同じ〔網切の甚五郎〕配下の盗賊である】巻四203頁「おみね徳次郎」 おかね 【おまさは、下総・佐倉の在にいた叔母・おかねが病死したので】巻六118頁「狐火」 吉田休甫
江戸	佐倉	峰隆一郎『白蛇』集英社文庫	【内儀は佐倉の新炭間屋『けやき屋』のおかみでお成という】54頁 【佐倉にたどり着いた。むこうに佐倉城が見えた。この城は、慶長十五年、老中・土井利勝が建てたものである。それから何度か城主は代わり、いまは松平(大給)左近将監が城主となっている】60頁 【浪人二十人は、なぜ佐倉に集まった?佐倉城を乗っ取るつもりでござんしょう?どうして佐倉なんだ?どこでもいいんじゃござんせんか?いや、何かわけがあるのだ】61頁
江戸	佐倉	高田衛編『江戸怪談集』下 岩波書店	【下総の国、うすいの四日市という所に、平六左衛門と云う者あり】115頁 * 四日市は未詳
江戸	佐倉	柴田錬三郎『嗚呼江戸城』中 文春文庫	【佐倉の農民一同に、江戸城内を見物させて、空車を牛に曳かせて、舟口を出した時、長兵衛は、宗吾に、「この江戸で、ほかに見物してえところがあるのなら、案内してさしあげますぞ」と云った。「では、あつかましゅう、お願いついでに、吉原の廓へ、ご案内下さいませまいか?」】113頁
江戸	佐倉	井上ひさし『馬喰八十八伝』朝日新聞社	* 佐倉にゆかりある土地、人名をひねる 【桜七牧】7頁→佐倉七牧のことでしょう 【桜の御殿様】28頁→佐倉の殿様でしょう 【長島茂兵衛】14頁→長嶋さんだと思います
江戸	佐倉	池波正太郎『秘伝の声』上 新潮文庫	【岩蔵は、下総・佐倉十一万石の城下外れに無外流の道場を構える笠井次郎右衛門のもとにあらわれ、試合を申し入れた】82頁
江戸	佐倉	鈴木俊平『天狗彷徨』文芸春秋	【天狗衆のなかの潮来勢をひきいて、林五郎三郎は大貫から涸沼をわたった。それをつたえきいて、塩ヶ崎の幕軍もかけつける。渡し船をつかう。砲撃がさかんになり、そこで渡し船にふみとどまり、自兵戦を演じた。川を挟んで対立した。砲撃が夕刻まで続いた。幕軍は、高崎藩、佐倉藩、棚倉藩の三つを使い、しやにむに大貫まで侵そうした。まさに平磯を乗っ取る勢いであった】92頁
江戸	佐倉	吉村昭『天狗争乱』朝日新聞社	【(*十一月)二十九日には佐原で榊原らの取り調べをおこなった。佐倉藩では、榊原らを武士道にのっって手厚く扱ったが、取り調べにあたる目付田沢対馬、勘定調所役石川次衛門は、取調所まで縄をかけて連れてくるように命じた。藩はこれに反対して縄をかけることはせず、逆に榊原らに正装の衣服をあたるなどの配慮をした】238頁 【佐倉藩で温かい扱いを受けた榊原一行に対する古河藩の扱いは、対照的に過酷であった。古河へ一行がしたのは日没時で、竹矢来をはりめぐらした侍屋敷の中へ入れられた。八畳の部屋に二十人ずつ押しこめられ、部屋の出入り口には錠がかけられた。灯火はなく、内部は闇であった】238頁
江戸	佐倉	宮本昌孝『夕立太平記』講談社	【妻の在所の下総佐倉へ行くことになった】114頁
江戸	佐倉	藤三男「道知」『日本囲碁大系』第五巻 筑摩書房	【於佐倉堀田邸】110頁
江戸	佐倉	平岩弓枝『妖怪』文芸春秋	【火急の際は、下総佐倉藩、上総久留里藩より援兵を出し、佐倉藩には三万石、久留里藩には一万石の替地を申し渡す】192頁 【ところで大御所家斉が死去した閏正月、当時の閣老は、首座の水の忠邦、太田資始、脇坂安童、土井利位であったが、その後、脇坂は二月二十四日に急死し、太田資始も六月三日をもって退任した。水野忠邦は、その空席に堀田備中守正篤と真田信濃守幸貫を補充した】253頁
江戸	佐倉	篠田達明『空の石碑』NHK出版	【船橋宿から佐倉まで、大和田、白井の宿場を通して八里の道のりである。一行は成田街道の間道をほとんど休まず歩いて佐倉にむかった。いまに西軍の搜索隊が追いつきはしまいかと必死だった】30頁
江戸	佐倉	祖父江一郎『中居屋炎上』集英社	【鹿島川に架かる木橋を渡り、外堀に沿って佐倉城をまわり込むと陰に隠れていた城下町がいきなり現れた】154頁
江戸	佐倉	乙川優三郎『かざら野』幻冬舎	【佐倉を過ぎると坂も多く】188頁
江戸			印旛沼という文字が出てくる作品

江戸	印旛沼		野村胡堂『人柱印旛沼』学芸社	【いくら掘ったって、地の底から湧く泥だ、どうにもなるものか】百姓の一人は、見廻り役人の後ろ姿へ、その言葉を叩き付けるやうに、泥だらけな手で、ツルリと汗を撫であげました。「さうとも、印旛沼が田になったら、替地をうんとやるというから口約束一つで、こんな目に逢はされてはたまものじゃない。先祖から伝わった田畑を掘割りに潰された上、手弁当て駆り出されて、一文にもならないとは、一体何の因果だ」第二の百姓の声は悲憤の涙にうるみす【7頁
江戸	印旛沼		中里介山『大菩薩峠』第二巻 筑摩書房	【頼まれもしない長州くんだりまで兵隊を出してどうする気だ。そんなことをするよりは印旛沼の堀割りでもした方がよっぽど割がいいぜ】134頁
江戸	印旛沼		柴田錬三郎『曲者時代』集英社	【田沼主殿頭意次が、老中の座に就いてから一年が経過した。その専権は、絶対ゆるぎないものとなった。意次は、矢つぎ早やに、積極政策をうち出した。一、下総印旛沼・手賀沼の干拓事業】521頁 【もとより、これらの積極政策は、意次の独創ではなかった。印旛沼・手賀沼の干拓は、八代將軍吉宗によって、実行されようとして、失敗した事業であった】522頁
江戸	印旛沼		松本清張『天保図録』中 朝日新聞社	【近ごろの（*水野）忠邦は佐藤信淵の「内洋経緯記」を手放したことはない。この本は佐藤信淵が天保四年にその子に筆記させたものだが、印旛沼の開墾利用については、いいことずくめで埋まっている】172頁 【今の忠邦は寝ても醒めても印旛沼のことが頭から離れない。これまで何人が手を着けても失敗したこの事業をおのれの手で完成させたいという功名心がある。外夷の侵寇に備えて奥州から江戸への米穀の輸送を安全にしたいという念願だ。印旛沼の開墾によって検見川沿岸に美田が生じるといのは、彼には副次的な目的にすぎなかった】173頁 【印旛沼の開墾工事が近々に着手されるという噂が、急に現実性のあるものとして諸大名の間に伝わり、恐慌状態を起した。「お手伝い」と称する賦役が莫大な出費と労力を要すると分っているからである。幕府は、ある藩の内実が裕福な場合、他藩と財政の均衡上、貧困にするために賦役を命じた】244頁 【さて、その藩の人選だ。鳥居甲斐守に相談すると、彼は立ちどころに次の藩を指名した。水野出羽守(沼津)、酒井左衛門尉(庄内)、松平周防守(棚倉)、黒田甲斐守(秋月)】247頁 【そもそも印旛沼の地形たるや、面積六里四方、湖岸線十九里余、そのかたちは、恰度、絵に描いてある墓場の火の玉のような恰好である。頭の方が北になって利根川に向かっている。尻尾の方は屈曲して西に流れ、その端が平戸村である。この尻尾から一筋の糸が江戸湾に向かっているが、これが検見川だ。したがって、印旛沼の水を内灘(江戸湾)に落とすには検見川という狭隘な細い糸をひろげなければならぬ。さらにこの川も途中までしか来ていないので、あとは開墾となる。大名の普請手伝いは、火の玉の尻尾の根元に当る平戸村から検見川に沿う地形をいくつかの丁場に分割され、それぞれの負担が決められた】260頁
江戸	印旛沼		藤沢周平『義民が駆ける』講談社文庫	【南町奉行矢部左近将監の報告を受けると、月番老中堀田正篤は、ただちに水野老中の三日間停止という措置をとり、水野欠席のまま、將軍の前で矢部の報告を中心に閣議を開いた。だが將軍家慶の考えが以上のようなものであり、また矢部の調べは、三方国替え停止は一挙に確定をみ、一度出した台命を取り消すという、空前の決定がなされたのであった】337頁 【（*水野）忠邦の言葉はだんだん愚痴めいてきたが、鳥居は菓子を入れた口を動かしながら、無表情に忠邦の顔をみている。「わしがどうというのではない。わしは痛くもかゆくもないが、幕閣の威信というものが」「酒井を印旛沼に嵌めこんでは、いかがですか」不意に鳥居が言った。忠邦は、口に持って行こうとした茶碗を、途中でとめて鳥居の顔をみた。下総国千葉郡平戸村の落とし口から、検見川村の海まで開墾して、印旛沼を干拓しようとする計画は、享保九年と天明五年の過去二回にわたって試みられ、いずれも失敗している。だが、忠邦は三度この計画に着手しようとしていた。洪水期の沿岸耕地の被害を消すだけでなく、この開墾によって、常総二国の物資が一日か二日で江戸に運べる舟運の便が開け、また干拓後地には良田が開けるとい見通しがあったからである】355頁 【忠邦の脳裏には、鳥居が言ったひと言がひっかかっていた。印旛沼開墾は難工事である。大名手伝いとなったら、どこの藩でもアゴを出すだろう。そこに酒井を、鳥居が言うように「嵌めこん」だら、さぞ腹が癒えよう、とちらりと思った】356頁
江戸	印旛沼		村上元三『田沼意次』中 毎日新聞社	【それがし（*松本十郎兵衛）、関東の河川を調べて歩いておりますうち、下総国にて、印旛沼と手賀沼を見て参りました。有徳院様の御代、二つの沼の干拓に手をつけられ、多額の費用を投じながら工事半ばにて取りやめになった、とうかがっております】157頁
江戸	印旛沼		平岩弓枝『妖怪』文芸春秋	【印旛沼の工事は新田開発による米の増収と三右衛門もいっていたし、幕府もそれを標榜していたが、本当の目的は江戸への水運である。利根川から印旛沼を経て、掘割伝いに検見川を抜け江戸湾へ出る船の道は、単純に銚子沖を通して江戸湾へ入るよりも早いとか、便利だとかいうものではなかった。いってみれば、これは海防の水路である。江戸湾の入口の浦賀水道が両側からせり出している二つの半島のせいで細くくびれている。その、もつとも狭い所を異国船によって封鎖されたら、諸国から船によって江戸へ運ばれて来る物資は凍結するということは、忠輝も先年、江戸湾巡視の折、その地を訪れて実感したものであり、その後、幕府が沿岸警備の対策を進めていることでもあった】312頁
江戸	印旛沼		山本周五郎『栄花物語』新潮社	【「佐倉は少し遠すぎる、国府台はまた近すぎる、検分したところによると占部はなにもない寒村で、印旛沼へもひと跨ぎのようだ】119頁 【印旛沼と手賀沼の干拓工事について、あまり関心をもたない人々に実地を見せ、その理解と協力を求めようというので、意次がみずから案内役になり、老中、若年寄、溜間詰のうちから、七人が同行する筈であった】237頁
江戸	印旛沼		堀和久『二宮金次郎』講談社	【三月に入り、渺渺とひろがる印旛沼を眺める道には桜がほころび、汗ばむほどの陽気になっていた】287頁

江戸	印旛沼		榎山良昭『黒船襲来幕末架空戦史』実業之日本社	【江戸の軍事的な弱点が江戸湾が封鎖された場合にあることは、これまで識者たちによってたびたび指摘されてきた。米や日用品の供給が江戸湾から入ってくる回船の輸送に頼っていることが、弱点なのである。このため水野忠邦は銚子から利根川を遡り、印旛沼に入り、印旛沼から検見川を下って、江戸湾に入ると水路を開拓しようとした。しかし水野忠邦が失脚し、阿部正弘が政権を担うと、財政難を理由に工事を中止してしまった】148頁
江戸	印旛沼		平岩弓枝『魚の棲む城』新潮社	【(*板倉屋)龍介は印旛沼を知っているか、と問われて、「参ったことはございせんが、名は承知して居ます」と答えた。下総国印旛沼は八代將軍吉宗が干拓し、新田開発に取り掛かって三十一万両という巨費を投じたが、思いの外の難工事で中途半端なままになっているというのは、まだ板倉屋へ養子に入る以前に耳にしたことがあった。「あの干拓は続けるべきだと思ったよ」沼に沿って堀をめぐらし、沼の水を落して新田を作るのと同時に、その掘割を検見川へつなぎ、江戸湾と利根川を結ぶ水路を完成させれば、これまで利根川を下って銚子沖へ出て房総半島を迂回して野島崎から浦賀水道を北上して江戸湾に入って来た舟は、遙かに安全で近い距離を通過して江戸へ入津出来る】159頁 【「加えてだ。利根川は暴れ川だ。大雨の年には必ずといってよいほど氾濫が起り、周辺の田畑を押し流す。しかし、この水路を利用して余分の水を江戸湾に落とすことになれば、水害も当然のこと、少なくなるというものではないか」】160頁
佐倉ゆかりの人が出てくる作品				
江戸	松平忠輝	家康第6男。佐倉5万石領主。後に後福島75万石に封じられる。	隆慶一郎『捨て童子・松平忠輝』上講談社文庫	【辰千代がようやく人並みの所領を与えられたのは、二年後の慶長七年十二月のことである。それでも兄弟中もっとも少ない下総佐倉5万石だった。この時、上総介に任せられた。十一歳で元服したのだろうか。辰千代は以後松平上総介忠輝を名乗った】124頁
江戸	松平忠輝	家康第6男。佐倉5万石領主。後に後福島75万石に封じられる。	半村良『講談久保長安』下 光文社	【ここでおもしろいのは、木曾と千葉の佐倉が開原の合戦でつながってしまったことと。なに、手品の紐つなぎのようなことではございせん、下総の佐倉には、木曾義仲の流れを汲む侍がいたのでございます】162頁 【忠輝は川中島城主になるまで、下総佐倉4万石をもらって上総介に任じられておまして、こう申しますと読者すでにお気付きの通り、関ヶ原合戦の折折中山道を進んだ秀忠軍について手柄をあげました千村、山村など言う木曾氏系の武士たちは、下総佐倉で冷飯を食わされていた連中でございます。となると、長安は忠輝が佐倉の殿様でいたころから、なにかと関係があったことはたしかなことになります。木材を欲しがった太閤のため、佐倉に逼塞させられていた木曾氏系の武士たちを、関ヶ原合戦に引っ張り出して手柄を立てさせ、木曾の木材管理者に戻ってやったからこそ、長安はそれ以後木材調達に絶大な力を発揮できたのでございます】190頁
江戸	松平忠輝	家康第6男。佐倉5万石領主。後に後福島75万石に封じられる。	中島道子『松平忠輝』PHP文庫	【慶長七年(一六〇二)春、十一歳になった辰千代は、元服して松平上総介忠輝と名乗り、武蔵深谷から下総佐倉4万石に転封加増された。それまで佐倉1万石は、忠輝の直ぐの兄信吉の所領だったが、常陸水戸に転じたため、後釜に据えられたというわけだ。したがって今日の江戸城伺候は、その御礼言上である】9頁
江戸	土井利勝	佐倉藩主	筆内幸子『小説春日局』泰流社	【三代將軍と確定した当時十二歳の世子竹千代に守役をつけることを命じた。酒井忠世、土井利勝、青山忠俊の三人である】115頁
江戸	土井利勝	佐倉藩主	柴田錬三郎『赤い影法師』柴田錬三郎選集 第四巻 集英社	【上座には、家康と秀頼が、並んだ。秀頼のわきに加藤清正、家康のわきに浅野幸長が座を占め、後方に、本多正純、土井利勝ら、上洛中の三河譜代の諸将が列座した】455頁
江戸	土井利勝	佐倉藩主	峰慶一郎『影武者徳川家康』上新潮文庫	【土井利勝は土井利昌の子ということになっているが、実は養子である。実父は三河刈屋城主水野下野守信元。この信元は家康の生母伝通院於大の方の兄である。つまり利勝は年こそちがえ、家康の従兄弟に当たる】352頁 【利勝が七歳になった天正七年、土井利昌の養子となり、生れたばかりの秀忠に付けられたのは、家康のせめてもの贖罪だったと思われる】352頁 【白井の城主であった原式部少輔胤義は、八千人もの軍勢を率いて小田原で戦った。そして、小田原落城の際、北条方に味方していた千葉家も原家も共に没落した。胤義は切腹を命ぜられ、一五九〇年七月十九日(天正十八年六月十八日)に江戸で生涯をどじた。白井城もその時から烏有に帰し、今は森林のなかに僅かな空堀とくずれかけた土手が過ぎ去った栄華の名残をとどめている。「天正十八年、小田原陣の時、千葉家も没落せしに原式部少輔が伴、主水佐は微弱なりしを、江戸御旗本に召出だされしが、天主教の宗門を信仰するによって、慶長十九年の秋刑罰に処せられ、その家断絶」と、前記の『古戦録』は簡単に結んでいる。この原主水佐はほかでもなく、我がジョアン原主水その人である】208頁 *『日本キリスト教歴史大事典』(教文館)によれば、原主水が処刑された日は、元和九年一〇月一三日とある
江戸	堀田正盛	佐倉藩主	網淵謙錠『史談・往く人来る人』文春文庫	【みづからは嬉々として家光の死に殉じながら、家臣どもには自分への殉死を揺るさなかつた堀田正盛の覚めた眼を評価すべきではあるまいか】62頁
江戸	堀田正盛	佐倉藩主	筆内幸子『小説春日局』泰流社	【ふくが竹千代の乳母になってから堀田家へ嫁ぎ、男の子を産んだ。堀田正盛である】121頁
江戸	堀田正盛	佐倉藩主	堀田正久『堀田家三代記』新潮社	【正俊ときに二十九歳(数え。以後も本書では数え年齢を用いる)の青年大名である。奏者番を拜命して三年目になっていた。父は老中堀田正盛。正俊はその三男だが、春日局の養子でもあった。正盛も春日局も既に世を去っていた】11頁
江戸	堀田正信	佐倉藩主	網淵謙錠『史談・往く人来る人』文春文庫	【さすがに家綱に殉死する者はいなかった。ただ一人、家光に殉死した堀田正盛の嫡男正信だけが、罪があつて流されていた淡路の配所で、折れた鉄で咽喉笛を掻き切って殉死した】64頁

江戸	堀田正信	佐倉藩主	堀田正久『堀田家三代記』新潮社	【(*堀田)正俊の兄正信の事件というのは二年前の万治三年(一六六〇)九月の出来事である。正盛の後を継いだ二代目佐倉城主堀田正信が「知恵伊豆」といわれる幕府の実力者松平信綱を批判、元老保科正之、老中阿部忠秋に信綱弾劾の書を差し出し、所領十万石を旗本達に頒つことを申し出た上に、届け出もせず突如無断で帰城してしまったのである(俗説では、佐倉惣五郎事件で気が狂った結果と説かれている)その年九月二十八日、正信はいつものように馬に乗り、部下と共に上野、浅草の寺社に詣でた後、東へ東へと駒を進めるので、従者たちは不安を覚えはじめ、殿いずこえ、と聞こえてくるうちに正信は婆馬足ををはやめて更に東進した。さては佐倉へ向かうのか、まさか、と従者らが迷っているうちに正信の姿を見失い、止むなく藩邸へとって返し、これこれかじかと報告すると、堀田屋敷内は大騒ぎになった。正信の弟正英は、乗馬の名手であり血気盛んな年頃でもあったから、直ちに駿馬を選んで兄の後を追ってはみたが到底追いつくわけではなかった。一方、正信は単騎、愛馬を励まして駆けつけ一氣に佐倉の城を至近に望む臼井角来の坂を下ったところで馬を乗りつぶしてしまった(現在同所に馬頭観世音が祀られているが、俗説ではここに惣五郎の亡霊が現われ導いたという)。仕方なく坂下から小一町先にある田町の佐倉城裏門まで歩いて行き、門番に開門を迫ったが、もとより簡単に城門が開くはずもない。開門、開門と大声を挙げている武士が、城主堀田正信であることが判明して城内は騒然となった云々とは佐倉藩植松家(正盛、正信の頃の筆頭家老)に伝わる文書にくわしく記されている】12頁 【そこで松平信綱の提案通り、正信を発狂したものと断じた。乱心、狂気の上下の無法であれば、一族に罪を及ぼすこともない。正信には十万石を治める能力は認め難いとして、希望通り城地没収、身柄は弟の脇坂安政に預けることとした。一方、堀田家の跡目は長子正国に継がせ一万俵の扶持を給うた。正信は、七年四月二十六日に充成の納れた室は、下総国佐倉の城主堀田相模守正順の臣、岩田忠次の妹縫で、これが抽齋の母である。結婚したとき充成が三十二歳、縫が二十一歳である】280頁
江戸	堀田正順	佐倉藩主	森鷗外「澠江抽齋」『鷗外全集』第十六巻 岩波書店	その十二【七年四月二十六日に充成の納れた室は、下総国佐倉の城主堀田相模守正順の臣、岩田忠次の妹縫で、これが抽齋の母である。結婚したとき充成が三十二歳、縫が二十一歳である】280頁
江戸	堀田正愛	佐倉藩主	森鷗外「澠江抽齋」『鷗外全集』第十六巻 岩波書店	その二十五【家督相続の翌年、文政六年十二月二十三日、抽齋は十九歳で、始めて妻を娶った。妻は下総国佐倉の城主堀田相模守正愛家来大目付百石岩田十太夫女百合とて願済になったが、実は下野国阿蘇郡佐野の浪人尾嶋忠助女定である。此人は抽齋の父充成が、子婦には貧家に成長して辛酸を嘗めた女を迎えたいと】312頁森鷗外「北條霞亭」『鷗外全集』第十八巻岩波書店その百六十二 【佐倉は堀田相模守正愛の世より備中正篤の世に移ってゐた】508頁
江戸	堀田正愛	佐倉藩主	森鷗外「北條霞亭」『鷗外全集』第十八巻 岩波書店	その百六十二【佐倉は堀田相模守正愛の世より備中正篤の世に移ってゐた】508頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	島崎藤村『夜明け前第二部』上 岩波文庫	【これは過ぐる安政四年、江戸の將軍謁見を許された後のハリスが堀田備中守の役宅で述べた口上の趣である】27頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	舟橋聖一『花の生涯』下 講談社	【同(*安政二年)十月十七日、老中堀田は、將軍の直接下命の形で、外国事務取扱に任せられた。史家に拠れば、老中首座たる堀田は、水戸斉昭が、ランベキとまで誹謗した通り、西洋通を以て目せられていた開国主義者の張本人であったが、その堀田を以てしても、ハリスの江戸出府の希望を、おいそれと許可することは、非常なる困難事であった。然し、これはハリスが、ニューヨーク出発以前から、胸に蔵した希望であって、先輩ペリーのなし能わなかったことを、こんどは自分が実行し、どんな危険を冒しても、江戸城へのりこまなければならぬと、意を決して居たのである。そこで堀田は、これを幕議にかけたが、拒絶を主張する一派と、受諾を是とする一派とは、互いにその利害を力説して、一向にきまらない。徒らに、小田原評定のみがつけられた。もつとも、今日から見ると、いかにも平凡な議題なように思われることでも、當時にすれば、一国の重大運命を賭する最高会議だったに違いない】7頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	邦光史郎『幕末創世記』上 真樹社	【安政四年(1857)5月、ハリスは、江戸幕府に対して、大統領の親書を奉呈するために出府したいという申し入れを行なった。だが幕府は、紅毛の異人を將軍に謁見せしめることなど、もつての外だとばかり、即刻拒絶した。ところが、この頃、幕閣に微妙な変化が生じていた。それは、天保14年から安政4年に至る18年間にも及ぶ長い間、老中を勤め、ペリー来航の時以来、老中首座を勤めてきた阿部伊勢守正弘が、首座の地位を新任の堀田正睦に譲って、自ら次席に退いてしまったことによる】277頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	笹沢左保『徳川幕閣盛衰記 失脚<完結編>』祥伝社	【江戸の大震災から七日がすぎた十月九日、阿部正弘は堀田正睦を老中に任じた。堀田正睦は佐倉十一万石、二年ほど老中を経験したが水野忠邦とともに罷免されている以来、溜之間に詰めていた。溜之間という詰席に在るのは、家門(徳川家の一族で松平姓を名乗る)または譜代の名門にして大身の大名である】245頁 【阿部正弘は堀田正睦を老中に再任しただけでなく、いきなり老中首座に祭り上げた。正弘みずからは、並みの老中に退いた】245頁

江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	大仏次郎『 天皇の世紀 』2 朝日新聞社	【阿部正弘の死後に幕府の中心となったのは、堀田備中守正睦である。佐倉藩主で正弘の在職中から外国掛を専門として正弘を助けて働いた。年齢も官歴も、正弘より上だったので名義上正弘よりも上席に位置したが、政治の全体は正弘が行い、堀田は外国掛で、ハリスとの交渉にも彼が当たった。佐倉は下総の小さい藩だが、正睦の奨励で蘭学者や蘭医を出し、種痘など早くから領内に実施したくらいで、正睦は世界事情に明るい外国掛として他の古い人々のように偏見の壁がなく、素直に物事の理解に務め、判断を過たない人物であった。思想感情ともに水戸の老公とはまったく正反対の立場である。以前から斉昭は堀田のことを「蘭癖先生」とあだ名して嫌っていた。この苦々しい知識人が墨夷との交渉に当る。老公は絶え難いのである】126頁 【堀田正睦の上洛には、条約の許可を得るのとは別に、不得意な使命を裏面に持っていた。將軍の世子にだれを立てるか、この機会に朝廷の思召しを得て決定したいと望んだのである】161頁【堀田は勅許奏請ということで朝廷への名分を立て、形式上の勅許を得て、水戸を始め、条約反対の立場にある諸大名を沈黙させ条約の正当性を天下に示そうと望んだもの。その為上京し二月初めから三月中旬にわたる長い時日を待たされて、この不首尾を見た。調印に勅許を俟たずともよいとの主張が江戸を出発前にも出て堀田自身がその持説だったのが身を傷つけることとなった。不許可は単に不許可で終わるだけでなく、朝廷が幕府に対して政治上の発言力あることを幕府から認めて、それに従わざるを得ない立場に身を置いたこととなる。二百年以上も京都を政治の外に除いて置く政策で貫いて来た幕府が自分からその規律を破って、朝廷の発言を向後重視せざるを得ない立場に身を屈した。条約が承認されたならば問題はないが、拒絶せられたとあって、堀田などが上京した使命が、考えれば影響の及ぼすところの大きい事態となり、幕府側にまったく自身のない現実を、列藩の前に暴露したことになる。その際、朝廷は外夷の侵入にはまったく解決の力なく、そのことは勅答文も暗に認めている。今度の条約では国威立難いというだけで、その結果には口を噤んだまま処置を幕府に委せるのである】187頁【高杉晋作は、勅諭の発令を聞いて「これ此の時、日本の日本たらんと欲する日」
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	吉村昭『 落日の宴 勳定奉行川路聖謨 』講談社	【阿部の死によって、老中堀田正睦が名実ともに幕閣の指導者になった。堀田は、早くから開国もやむなしという意見をいだいていて、阿部の死の翌日、交渉経過の報告に江戸にもどってきた下田奉行井上清直から事情を聴取し、二十九日、ハリスを江戸へまねくことを正式に決定した】351頁【川路は、ハリスと堀田がたがいに会見をのぞんでいることを知っていたので日程を調整し、跡部良弼、池田頼方両町奉行に、二十六日四ツ(午前十時)にハリスが堀田の屋敷におもむくことをつたえ、警備を要請した。訪問日に、堀田の屋敷に入ったハリスは、熱っぽい口調で外交その他世界情勢等について説き、ヒュースケンと森山がそれぞれ通訳し、堀田はひたすら耳をかたむけた】361頁【堀田は、諸大名の中で洋書購入にこのほか熱心で、それらを和訳したものをもろく読んでいただけに世界の事情に通じていて、ハリスの話に同調するようにしきりにうなずいていた。ハリスの日記その他を参考にしてつづられた「ハリス伝」(カール・クロウ著)の中で、ハリスの堀田に対する印象として、「堀田もだいたいハリスと同じ結論に達していた。ゆえに、彼がハリスの陳述によってはじめて啓蒙されたと解するのは、当をえたものではあるまい。日本統治に一役を演じた大名が数あるなかで、彼は私利私欲に動じない、まことに識見高邁な政治家のひとつであった。その冷厳な表情は、めったに喜怒哀楽を色に出さなかったが、彼のハリスに対する気持ちは、友情に近づいていたことはうたがいない」(田坂長次郎訳)】363頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	佐藤雅美『 官僚 川路聖謨の生涯 』文春文庫	【堀田はちがった。ペリーが持参してきたアメリカ大統領の国書—これは諸大名に写しが配布された—にはこんなくだりがあった。「交易(通商)には利がある。だから五年あるいは十年と限って交易をはじめられてはどうか。それでも利がないというのであれば、そのとき止められればいい」これに、ほとんどの人が素直に耳を傾けることができず、おためごかしではなからうかとか、まやかしが隠されているのではなからうかとか様々に懐疑をほさんだのだが、堀田はあっさりこう受け止めた。「進言にしたがえばいい。したがって利があればつづければいい。なければ止めればいい」それにこうも思った。「軍艦でも、大砲等の兵器でも、兵の訓練度でも、彼、外国にはおよばない。戦えないのであれば、進言を聞き入れるしか道はない」通商条約の締結と迫られ、どう対応すべきかと論理的かつ明晰に思考すると、結論は当然そうなる】337頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	子母澤寛『 勝海舟 』新潮文庫	【誰からとなく、異国との条約の勅許を仰ぐために、老中の堀田備中守様が上洛するそうだが、朝廷では、かねて、醍醐中納言様お一人の外は、悉く、異国との交易は許さぬ御趣意らしいから、御老中も余程お骨折らざらうなどという話が出た】36頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	津本陽『 開国 』日本経済社	【水戸から、ハリス暗殺の凶徒が江戸にきて捕縛される騒動もあった】197頁【ながらく国家の難局にあたっていた閣老阿部正弘は、このときすでに世を去っていた。安政四年六月十七日、過労がつもっていたためにわかに急逝した。阿部のあとをうけ、幕政の中心となったのは、佐倉藩主堀田正睦であった。彼は外事掛をつとめ、ハリスとの交渉にも当たっている。外国に対し偏見のない人物であった。彼は水戸の斉昭と、思想のうえで正反対の立場をとっていた。斉昭は堀田のことを「蘭癖先生」と呼ぶ。堀田は斉昭のことを「好からざる人」と呼び、黙殺しようとした】199頁【堀田正睦が川路聖謨らとともに京都に入ったのは、安政五年(一八五八)二月であった。幕閣では、条約勅許に公家たちの反対があっても、それをうちやぶるのにたいした手間はいらぬと見ていた】214頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	佐藤雅美『 開国 』講談社	【堀田は通商条約を締結することにより、歴史に名を残すとか功名手柄を立てるといような野心を抱いたことはない。また通商条約を締結するという外交問題をたとえば自身や幕府のために利用するという卑劣な邪心を抱いたこともない。ただ一途に、純粹に、日本の将来を案じ、日本のためを思い、鎖国の夢をむさぼっていた日本を、蒸気船やエレキテルやテレグラフにより距離が一気に縮まったという国際社会に、一日でも早く仲間入りさせよう、それが日本のためであると条約調印を急いだにすぎない。しかしそのため堀田自身には思いもよらぬことだったが、周囲にさまざまな軋轢を、これでもかこれでもかとばかりに、つぎからつぎへと引き起こしてしまった。まず不用意に京へ出かけていって京に潜在的にある、天皇自身ははっきり自覚していた政治権力の奪取という欲望に火をつけ、油を注いでしまった】639頁

江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	吉村昭『黒船』中央公論社	【年が明けた安政五年、堀田は通商条約締結について朝廷の諒解を得るため京都におもむいたが、尊王攘夷論者に感化されていた公卿たちは、これに激しく反対し、堀田は朝廷工作に失敗して江戸にもどった。その後、開国論を主唱する大名の中心人物であった彦根藩井伊直弼が老中に就任した。この間に、將軍継嗣問題が起って、病弱な將軍家定の後つぎに紀州藩の徳川慶福を推す派と、徳川斉昭の第七子である一橋慶喜を望む派とが激しく対立していた。井伊老は紀伊派、斉昭は一橋派で、開国論者は紀伊派、尊王攘夷派は一橋派という形となり、事態は一層複雑な様相を呈した】217頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	津本陽『おおとりは空に』淡交社	【佐倉藩主堀田正睦(はじめ正篤)も、(*井伊)直弼とは歌道のうえで親密になった。正睦と直亮とは疎遠であったが、直弼には老中職のあいだの秘事を、後々の心得としてこまかい点に至るまで教えてくれた】201頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	宮尾登美子『天璋院篤姫』上 講談社文庫	【小の島からの密書がまたもや届いたのは八月も末のことで、今度は小袖の袷でなく、二重底になった文管の底にしたためた手紙であった。それによると、斉彬は、ご承知の如くたゞいま老中首座の堀田正睦は、かつて天保十四年、老中を退いていたものを、正弘の推挙によって再び返り咲いたひとで、一橋派の強力な推進力となっているので、今後の策のすめかたについては格別心配はいらぬ旨し、しかしながら、と但し書きがあった。但し書きとは、堀田正睦は元来開明的な性癖で、「蘭癖」という別名があるほどだから、このところハリスが幕府に迫っている日米修好通商条約に調印するという懸念は大いにある、こういう重大危殆に瀕したとき、西の丸君を早くお定めあるのが万全の策と思われるので、御台所みずからお口添えし、將軍と一橋御との会見を一日も早く実現して頂けるよう、ご尽力を頼む、というものであった】292頁 *天璋院は江戸幕府十三代將軍徳川家定夫人。通称は篤姫。天保七年、鹿児島に生まれ、島津斉彬の子として育てられる。安政三年、家定と婚儀が行なわれることとなり、堀田正篤は篤姫に遠慮して自分の名前「篤」を変え、堀田正睦とする。
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	祖父江一郎『中居屋炎上』集英社	【堀田備中守正睦の客間には噂に聞いたように舶来品の家具備品が備えてあった。二十畳もあろうかという板の間の中央に両手で抱えるほどの地球儀を載せた長方形の大きなテーブルがあった。テーブルの真ん中に世界地図が浮か彫りになっていて、全面を覆う一枚板の分厚いガラスが敷いてあり、四囲に並ぶ椅子の背もたれや肘掛けには見事な彫刻が施してあった】209頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	柳田昭『黒船なにをするものぞ 蘭学者・川本幸民』朝日ソノラマ	【その後、同年(*安政四年)十月、アメリカ総領事ハリスが將軍に謁して日米通商条約の締結を要求し、明けて安政五年正月、幕府は堀田正睦を上京させ条約勅許を奏請したが、三月、朝廷はこれを却下した】189頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	永井義男『幕末暗号戦争』幻冬舎	【これだ、『桜』とある。同じさくらでも、これは地名の佐倉(千葉県佐倉市)ではなからうか? 「領地が佐倉ということか?」そうだ。佐倉藩主といえば、老中の堀田備中守正睦様「違いない。桜は堀田正睦様の隠名だ。またそう解してこそ、意味が通じる」】66頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	峰隆一郎『虚陰十郎必殺剣』廣済堂文庫	【まず、そなたの素性を訊かせていただく。わたしは織、これは綾と申します。幕府老中堀田備中守の女隠密織、そして女隠密綾であった。備中守の隠密は、すべて女、それが全国に散らばっている。それらが備中守の情報源となっているのだ。織が、苗木藩の阿里的の死を知ったのも、この情報源によってであった。「わたしたちは、陰十郎の密書を手に入れなければなりません」「条件は?」「備中守様は、下総佐倉十一万三千石。佐倉藩士として一千石にてお召しかかえになります」「一千石が餌か?」妖之助は嘲笑した】638頁
江戸	堀田正睦 (旧名 正篤)	佐倉藩主	檜山良昭『黒船襲来 幕末架空戦史』実業之日本社	【堀田正睦は佐倉藩の藩主である。水野忠邦が老中筆頭のときに老中に引き立てられたが、忠邦と衝突して老中を辞職し、溜まり間詰め大名となっていた】175頁
江戸	佐藤泰然	順天堂創設者	司馬遼太郎『胡蝶の夢』第一巻 新潮社	【下総の佐倉の城下にある蘭方医学塾「順天堂」について触れておかなければならない。—蘭方医学を学ぶなら佐倉にゆけ。—ということが、東日本のその道の志願者の常識になりはじめていたが、この塾は、良順の実父佐藤泰然ひとりの手で興った。ただ佐倉十一万石の領主堀田備中守正睦が、江戸城の茶坊主あたりのあいだで、「西洋堀田」というあだ名をつけられたほどの開明家だったことも、順天堂の繁栄の条件のひとつになっている】165頁 【この私立蘭方外科学兼病院が、結局は、大坂の緒方洪庵塾(適塾)とらんで蘭学塾の日本における二大淵源になる】176頁 【渡辺弥一兵衛は、一家をあげて歓迎してくれた。すぐに番茶が出たが、「佐倉の自慢は殿様と水でございます」という口上がついた。なるほど水がいいために茶が格別にうまいように思われた】174頁

江戸	佐藤泰然	順天堂創設者	子母澤寛「狼と鷹」『子母澤寛全集』第十二巻 講談社	【しかし泰然にしても松本良甫にしても(*高野)長英には手を焼いた。勿論言う事に間違いは無い。長英の言う通りである。しかし時と場合というものがあ。みんな言いたい事があってもそれを飲み込んで沈黙している事が多いものである。それを酔っ払ってほころ構わずに吼号する。その飛ばつちりは遠からずして当然来た。長英の「夢物語」には蘭学関係の者達が懐え上がった。自分の言いたい事を何の遠慮なくずばずば言えたら、それあ気持ちはいいだろう、ところが人各々にその人の周囲というものがある。ことに当時江戸で一番はやっている医者ではあるまいかと言われていた泰然が、突然薬研堀の門をしめ、下総佐倉へ引込んで終ったことについて、何故だろうという疑いは誰もが持った。如何に堀田家十一万石の城下でも八万石の江戸から見れば知れている。泰然はここに引込んで堀田侯の侍医になった。米噌の事までいろいろ面倒を見た事だから江戸にまごまごして高野長英の尻を持たされては叶わない。ここへ逃げたのはいい手を打った事になる】327頁 【佐倉の城下本町に那須屋というのがあった。宏大な屋敷であったが、どうい訳があったか、これが俄かに没落して廃屋同然になっていたのを、かねて泰然を御ひいきの堀田侯が泰然に賜ったという。そこが佐倉の順天堂だ】336頁 【佐倉へ移った泰然は江戸を離れたと言う事で一步退いたように見れば見れない事もない。大槻如電の書いたものに、当時の江戸には臨床治療家として伊東玄朴、戸塚静海あり蘭学家としては坪井信道、箕作阮甫などが居て、泰然はこれらの上へ出る事が出来ないを知って佐倉に移住したなどであるが、飛んでもない、そんな事で縮むような泰然ではない。どちらかと言えばむしろ堀田侯が泰然を買って頼りに佐倉入りをすすめるのでこの好意を断りかねて受けたという方が本当だろう。その証拠には泰然が佐倉で開いた順天堂塾の盛大であった事は、田舎でありながら寄宿生は常に百人から百二十三人に及んだと、泰然の末子伯爵林董が思い出話に書いている。泰然は内科より外科医としてすぐれていたようだ。ここで日本初めて襖の陰で、息子の泰然の声を聞いた】190頁
江戸	佐藤泰然	順天堂創設者	藤沢周平『義民が駆ける』講談社文庫	【多古をすぎ成田をへて、堀田十一万石の城下町佐倉に入ったのは、夕刻近くであった。泰然の家を通行人にたずねると、すぐにわかった。家は佐倉の町はずれにあつて、その附近には農家や小商いの家が点々とあつただけで、田舎がひろがっている。道の北側間口十五間、奥行五十間の地に、粗末な建物が建ちならんでいて、門に近づいた長英は、門内に多くの人がいる気配を感じ、足をとめた。治療所と塾があるらしく、人の姿がちらつている】577頁 【奥の部屋にみちびかれた長英が座ると、泰然が襖をしめてむかい合つて坐つた。「驚きました。生きておられましたか」泰然は、信じられないように長英を見つめた】578頁
江戸	佐藤泰然	順天堂創設者	吉村昭『長英逃亡』毎日新聞社	【騒然と殺到して来る政府軍兵士を前に、泰然・良順の親子は微笑を浮かべて腹め合っていた。「リュウマチのほうはどうだ」泰然が聞いた。「すつかり良くなりました」それはよかった、昔、中風で捕まつたお尋ね者がいたが、最期は惨めなものだった」天保末年頃の上州の博徒で、国定村の長岡忠治という男のことらしかつた。「これでも天下の名医ですぞ、中風のやぐざと一緒にされてはかたがた泰然と良順は声を出して笑つた。「父上、お元気で」おぬしもの」政府軍の隊長がいきりつた。「松本良順、神妙に同道せい！」「そういきり立ちなさんな、ハナからその積もりだよ」良順は立ち上がると『ジャパン・パンチ』を研海に放つて多津にいった。「釜さんは蝦夷を征服したそだ、今頃、箱館はお祭り騒ぎだろう】171頁 *日本テレビ時代劇スペシャル第四弾を文庫化したもの
江戸	佐藤泰然	順天堂創設者	杉本義法『五稜郭』角川文庫	【江戸に帰つた鉦之進は、すぐ、佐藤泰然のところに行き、彼の紹介で横浜にいる私人モリーの診察を受けた】175頁 【この(*滝川)長安は、千葉の佐倉の出で、初めは佐藤泰然の養子、舜海について医学を教わり、そのあと江戸に出て医学館に学んだ】215頁
江戸	佐藤泰然	順天堂創設者	渡辺淳一『白き旅立ち』新潮文庫	【上野彦馬が単独で、しかも、人物を写したのは、松本良順であった。良順はこのとき、おしろいを顔いっばいに塗られて、良順の寄宿先の本蓮寺屋根瓦の上に立たされ、じつと不動の姿勢を五分も保っていたので、道行く人は鬼瓦とまちがえたという笑話がある】65頁 【彦馬が松本良順の顔にお白粉をぬって撮影したもの、被写体を明るくすることを説いた蘭書に、ヒントをえてのことであつた】71頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の息子 *明治・大正時代に再掲	子母澤寛「狼と鷹」『子母澤寛全集』第十二巻 講談社	【昭和六七年度の頃である。幕末の和蘭医学が国移入について詳しい研究をしていた鈴木要吾という人がいた。東洋大学を出て以来、船橋在の鎮守の雑木林のある近くに住つた一人で住んでいる。友人がしきりに良縁を持ち込むが乗ろうとしない。いつの間にか頭が真っ白になって五十を越えて終つた】317頁 【わたしは鈴木さんがわざわざわたしの為にと送つて下さつた資料の包を取り出して仏壇に供え香花を手向け、いささかの供養をしたが、時去つて資料はまた書棚に積まれて忘れることもなく今日に及んだ。作者がこれより書いて行くその資料の一人。それは徳川奥御医師蘭医天神前。法眼松本良順、のち順、幼時は順之助といつた人である。鈴木氏言う。稀有の豪医で現在ではこう言う型の医者など不必要かも知れないが幕末のような混乱時代には無くてはならぬ人物であつたと思うと】318頁 【不二山丸は品川沖に錨をおろし、上陸した新選組は宿の西はずれにあつた釜屋という旅宿に一先ず落ち着いた。狭い古ぼけた天井の低い家であつた。近藤勇はここで一段落つくと、後は副将土方歳三に任せ、自分はその後胸の病いがだいが悪くなつている沖田総司を連れて釜屋の前の浜から舟を雇つて、松本良順の医学所に向つた】405頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の息子 *明治・大正時代に再掲	子母澤寛『勝舟』新潮社	【江戸から、寄合医師松本良甫の総領良順がやつて来た。ポンペ軍医について、医学を勉強が目的だ。ほんとうは下総佐倉の藩医佐藤泰然のせがれ。まだ十九だがなかなか出来る人間だ】16頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の息子 *明治・大正時代に再掲	土居良三『幕臣勝麟太郎』文芸春秋	【松本順(当時良順)の名は、第一回鹿児島訪問のメンバーの中に見える。第三期生であるが、海軍ではなく、ポンペについて医学習習のために選ばれたのである】192頁 【松本は明治になって初代陸軍軍医総監となつた人物で、日本における近代医学創立者の一人である】192頁

江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の次男 *明治・大正時代に再掲	吉村昭『夜明けの雷鳴 医師高松 凌雲』文芸春秋	【松本は、佐倉藩医佐藤泰然の次男として生れ、幕府の医官松本良甫の養嗣子となり、坪井信道、竹内玄同、林洞海について蘭方医学を修めた。その後、幕命によって長崎に赴き、オランダ軍医ボンペから西洋医学の実技を学んで熟達し、様式病院である長崎養生所を設立した。遊学を終えて江戸にもどった松本は、將軍家茂の侍医となり、翌文久三年西洋医学所頭取に任じられた。幕臣である松本は、江戸城が官軍に接収されると、子弟を従えて会津に入り、官軍と会津藩兵との激戦の中で野戦病院を設けて負傷者の治療に当たった】139頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の次男 *明治・大正時代に再掲	篠田達明『空の石碑』NHK出版	【「新選組はこの春から西本願寺の集会所に屯所を移しましたので、いちど、みにきてください」誘いに応じた良順は、南部と連れ立って西本願寺へでかけた】100頁 【近藤と土方に付き添われて新選組の屯所に当てられた北集会所に上がった】100頁 【「先生には見苦しいところをおみせしました。じつは、あの者どもは病人なんです」「なに、病人・・・」良順はおどろいて近藤の目をみた】101頁 【しばらく近藤と一杯やりながら歓談していると、土方がやってきた。「先生のおっしゃるような病室をしつらえました。ひとつ検分してもらえませんか」「ほう、もうできたのか!」】102頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の次男 *明治・大正時代に再掲	三好徹『戦士の賦 土方歳三の生 と死』上 秋田書店	【松本はそうやって帰った。二人だけになると近藤は、「立派な人だ。ああいうのを国手というのだろうか」と、感心しようといった。歳三が無言でいると、よほど感銘を受けたのか、近藤は、「あの人には、香気がある」とまほめちぎった。近藤には、自分が接したことのないものに触れると、いたく関心してしまうという癖があった。松本良順のような医師は、これまで近藤が知っている医師とは、まったく違った型の人物だった。病人を治すなどというのは、仕事の一部に過ぎない、などという医師はいなかった。もちろん、松本もそれだけの志を持った人物ではある。彼は、天保三年の生れだから、近藤より二歳年長である。佐倉藩の医師佐藤泰然の次男だが、十八歳のときに幕府の医官松本良甫の養子となり、養父のすすめで蘭学を修め、さらに幕命で長崎へ赴いて、オランダ人医師ボンペから西洋医学を修得した】135頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の次男 *明治・大正時代に再掲	笹沢左保『沖田総司』廣済堂	【近藤勇はすぐ総司を連れて、神田和泉橋の医学所へ向かった。総司は、松本良順(後の松本順)の診察を受けた。結果は最悪であった】289頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の次男 *明治・大正時代に再掲	司馬遼太郎『燃えよ剣』下 文藝春秋新社	【とどき旧幕府典医頭松本良順が若党や門人を寄越して薬をどけてくれるが、それもだんだん遠のいていた】317頁 *とどける相手は新選組の沖田総司
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の次男 *明治・大正時代に再掲	吉村昭『日本医家伝』講談社	【明治元年八月二十一日早朝、旧幕医松本良順は、会津藩主松平容保と若松城の一室で対していた】216頁【良順は、藩主容保が死を覚悟していることを察した】218頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の次男 *明治・大正時代に再掲	司馬遼太郎『本所深川散歩・神田 界隈街道をゆく36』朝日文庫	【松本良順(明治後は、順)は関東における蘭方医術の本山のようにいわれた佐倉の順天堂の佐藤泰然の次男で、幕府の奥医師松本家に養子に入った。二十六歳のとき、幕府の命令で長崎にゆき、蘭医ボンペから西洋医学を体系的に伝授され、文久二年(一八六二)、江戸にもどって、やがて幕府の医学所の頭取となった】251頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の次男 *明治・大正時代に再掲	森満喜子『沖田総司・おもかげ 抄』新人物往来社	【良順はその後もたびたび(*壬生から西本願寺に移った新選組の)屯所を訪れ、台所の改造を指示したり(非常に衛生設備が悪かったという)残飯で豚を飼わせ、これを屠殺して隊士等の栄養にさせ、また残飯を干飯にして鶏を飼わせ、卵を採取させるようにした】125頁 【佐藤彦五郎が井上松五郎に宛てた手紙に、「(*慶応四年一月)十五日、釜屋と申す宿屋へ旅宿、近藤は御典医松本先生方へ惣司同道にて療治に赴き候」とある。近藤と沖田は品川に上陸せずすぐ小舟に乗って河口から隅田川を遡り、神田和泉橋の西洋医学所で松本良順の治療を受けることになった】155頁 【近藤勇の肩の鉄砲傷は松本良順によって破砕された骨片を抜き取られ、目に見えてよくなってきた】156頁
江戸	松本良順	順天堂創設者 佐藤泰然の次男 *明治・大正時代に再掲	秋山香乃『歳三往きてまた』文芸社	【会津城下七日町清水屋が土方の会津での落ち着き場所として割り当てられた。清水屋に入った土方は翌日、松本良順と再会し、早速足の傷を診てもらった。医者でありながら身の危険を顧みず、近い将来必ず戦場となる会津に江戸からわざわざやってきた松本を、土方は尊敬している】265頁
江戸	林董	佐藤泰然の末子・英 国公使・外務大臣 *明治・大正時代に再掲	網淵謙錠『聞いて極楽』文藝春秋	【幕末の蘭学塾といえば、西の適塾と東の順天堂が有名である】130頁 【万延元年(一八六〇)三月三日、佐倉にも大雪が降った。この日、江戸では大老井伊直弼が桜田門外で水戸と薩摩の浪士十八名に襲われ、首級を挙げられるという大事件があった。そのニュースが佐倉にとどいたとき、佐倉の藩士は快哉を叫んでこれを歓迎した。〈蘭癖〉大名といわれるほど西学文明の導入に積極的だった殿様の堀田備中守正睦が井伊大老と意見が合わず、老中首座を罷免され、国許に蟄居退隱の身となった恨みがあつたからである。そして子供たちの間に桜田事件の遊びがはやり、手毬を直弼の首に見立てて、これを投げ合つて悦んだ。その遊びで、最年少の自分はいつも首を斬られる大老役をやらされるのが嫌で嫌でたまらなかつた。と、後年林董は回顧談で語っている】131頁
江戸	林董	佐藤泰然の末子・英 国公使・外務大臣 *明治・大正時代に再掲	網淵謙錠『幕末に生きる』文藝春秋	*桜田門外の変について、林董の著書『後は昔の記』から引用して話を進めている。60頁
江戸	林董	佐藤泰然の末子・英 国公使・外務大臣 *明治・大正時代に再掲	子母澤寛『行きゆきて峠あり子母 澤寛全集』十二 講談社	【通弁吉、林董三郎】122頁
江戸	手塚律蔵	佐倉藩に招かれた英 学者	半沢周三『日本製鉄事始一大島 高任の生涯』新人物往来社	【手塚は本郷元町で英蘭学塾を開き、その英塾から西村茂樹が出て、華族女学院の校長になった】54頁
江戸	手塚律蔵	佐倉藩に招かれた英 学者	吉村昭『白い航跡』講談社	【手塚殿は、今では瀬脇寿人と名を改めている。英語の教えをうけた者は、西周助、津田仙、木戸孝允、神田孝平など数知れず】176頁
江戸	手塚律蔵	佐倉藩に招かれた英 学者	村松剛『醒めた炎木戸孝允』中 央公論社	【蘭学塾の又新堂といえば、安政のはじめの江戸では有名だった。場処は水道橋のそばの本郷元町で、先生は手塚律蔵である】136頁

江戸	手塚律蔵	佐倉藩に招かれた英学者	柳田昭『黒船なににするものぞ蘭学者・川本幸民』朝日ソノラマ	【幸民が第二冊目を発刊した安政二年、天文方蕃書和解御用の局を天文方から独立させて、九段坂下に洋学所が建てられることになり、名も蕃書調所と改称されることになった。そして、この新しい学問所の御用役を命じられた勝海舟らによって教授方の人選のため、江戸在住の蘭学者の名簿が作成された。当然、世の脚光を浴びる幸民の名が挙がらないはずはなく、すでに四十七歳になり、実力からすると遅きに失した感があるが、幸民は、安政三年二月に発足した蕃書調所の教授手伝に任せられたのである。スタッフは頭取に古賀謹一郎、教授としては蕃書和解御用の時代から翻訳管として出仕していた箕作阮甫と杉田成卿、教授手伝は幸民をはじめとして筆頭に高島五郎、松木弘安、東条英庵、原田敬策、手塚律蔵、田島順助の名が挙がっている】174頁
江戸	木村軍太郎	佐倉藩士	森鷗外『伊澤蘭軒』『鷗外全集』第十七巻 岩波書店	その二百【文久中に佐倉藩士木村軍太郎と云うものが、長崎から来て住んだ。隣人が「木村という人は裸馬に乗って歩く人だ」と云った。恐らくは様式の馬具を装って馬に騎ったのであろう】428頁
江戸	木村軍太郎	佐倉藩士	子母澤寛『行きゆきて峠あり子母澤寛全集』十二 講談社	【源吾は本来遠州掛川五万石太田備後守の旗奉行、甲賀孫太夫の四子だ。江戸下屋敷で生れたが佐倉の和蘭学者木村軍太郎について蘭学をやり出したのが十七歳】216頁
江戸	木村軍太郎	佐倉藩士	邦光史郎『幕末創世記』上 真樹社	【この下田にペリーの艦隊が入って以来、諸藩の武士たちがよく見物にやってきたらしく、(*吉田)寅次郎たちの泊まっている岡村屋にも、佐倉藩士木村軍太郎と名乗る者が同宿していた。蘭学に堪能だという木村は、遠眼鏡まで持参していて、柿崎の海岸から、つい眼前百メートルばかりの所に碇泊しているミシシッピー号を眺めて、「うむ、メリケン男も、われらと同じ立小便を致すものと見ゆるな」などと真剣な面持でしきりに呟いている。「どれどれ、すこしお貸し下さらぬか」拝借して、寅次郎も覗いてみた】186頁
江戸	木村軍太郎	佐倉藩士	吉村昭『黒船』中央公論社	【安政二年正月、洋学所の名で設立計画が進められ、安政三年二月に洋学所を蕃書調所として開設し、古賀謹一郎を頭取に任命した。第一の目的は洋書の翻訳であったが、それはアメリカ艦隊来航以後、緊急課題となった警備の拡充と密接な関係があった。武力強化のためには、欧米の軍事科学書を理解することが必要で、調所ではそれらの書物の翻訳が主要な仕事になった。また通訳官養成のため、幕臣と諸藩士の中から有為な人材を選んで語学を修得させることにもつとめていた。このような重要な役目をもつ機関だけに、それに所属した所員には、全国から秀でた洋学者が任命されていた。教授職には津山藩医箕作阮甫、小浜藩医杉田成卿、教授手伝に徳島藩士高島五郎、鹿児島藩士松木弘安、萩藩医東条英庵、伊東玄朴門人原田敬策、佐倉藩士手塚律蔵、三田藩医川本幸民、安中藩士田島順助、宇和島藩医村田蔵六、佐倉藩士木村軍太郎、福井藩士市川斎官という一流の洋学者たちであった。また備えつけられた洋書の数も質も他に比類のない充実したもので、蕃書調所は、日本随一の翻訳機関であり洋学校でもあった。初めは蘭学が主であったが、英学がこれに代り、フランス語、ドイツ語、ロシア語の翻訳、教育もおこなわれていた】25
江戸	木村軍太郎	佐倉藩士	祖父江一郎『中居屋炎上』集英社	【木村軍太郎が大手門の外まで三人を迎えに出た。額が広く顎が張って、いかつい面相をした色の浅黒い男であった。年齢は二十六歳で、佐倉藩の兵制を統括する高島流砲術掛に就任し江戸詰めになったばかりだった】154頁
江戸	手塚節蔵	大築尚志の弟で大築節蔵のこと	吉村昭『黒船』中央公論社	【ただちに、英和辞書編纂の構成員が古賀(*謹一郎)によって指名された。主任は(*堀)達之助で、編纂に専念し、蕃書調所教授手伝の西周助(周)、箕作阮甫の孫箕作貞一郎、千村五郎、竹原勇四郎、高島秋帆の孫である太郎、手塚律蔵の養子節蔵が達之助を助けることになった】259頁
江戸	吉見南山	佐倉藩士	森鷗外『北條霞亭』『鷗外全集』第十八巻 岩波書店	その百六十二【成徳書院は南山吉見頼養の總裁たる学校で、南山と謙堂とは親善であった】504頁
江戸	平野縫殿(重久)	佐倉藩士	森鷗外『北條霞亭』『鷗外全集』第十八巻 岩波書店	その百六十二【平野重久撰の「南山先生吉見君墓銘銘」にも】504頁
江戸	平野縫殿(重久)	佐倉藩士	祖父江一郎『中居屋炎上』集英社	【平野縫殿は藩主堀田備中守正睦の腹心であった。少壮のうちに昌平黌を優秀な成績で卒業、藩校成徳書院都講、教授、総裁を歴任、このほど年寄として藩の仕置きに参与した人である】155頁
江戸	浜野	文章の前後から、佐倉藩に関わりのあった人物と読める	森鷗外『北條霞亭』『鷗外全集』第十八巻 岩波書店	その百六十二【謙堂の佐倉侯のために書を講じたのは、何れの年よりの事であるか。浜野氏の検する所に従えば、其初めは文政三年なるが如くである】507頁
江戸	岩田縫	澁江抽齋の母	森鷗外『澁江抽齋』『鷗外全集』第十六巻 岩波書店	その十一【七年四月二十六日に允成の納れた室は、下総国佐倉の城主堀田相模守正順の臣、岩田忠次の妹縫で、これが抽齋の母である。結婚したとき允成が三十二歳、縫が二十一歳である】280頁
江戸	岩田百合	澁江抽齋の妻	森鷗外『澁江抽齋』『鷗外全集』第十六巻 岩波書店	その二十五【家督相続の翌年、文政六年十二月二十三日、抽齋は十九歳で、始めて妻を娶った。妻は下総国佐倉の城主堀田相模守正妻家来大目付百石岩田十太夫女百合として願済になったが、実は下野国阿蘇郡佐野の浪人尾嶋忠助女定である。此人は抽齋の父允成が、子婦には貧家に成長して辛酸を嘗めた女を迎えたいと】312頁
江戸	依田学海	佐倉藩士・漢学者	子母澤寛『新選組始末記』中公文庫	【後に、江戸城内で、近藤と共に登場した土方が、佐倉藩士依田学海翁に伏見鳥羽の戦争の事をきかれ、「もう槍や剣では戦争というものではできません」といった事が、翁の著書『譯海』の中に見えている】264頁
江戸	依田学海	佐倉藩士・漢学者	子母澤寛『新選組遺聞』中公文庫	【再挙を計らんとしていた近藤勇が、慶応四年四月三日官軍の手に捕らえられた顛末は、旧佐倉藩留守居役だった依田百川老人の『譯海』の中にある話を、これまでは、多くそのまま信用していた】281頁
江戸	依田学海	佐倉藩士・漢学者	子母澤寛『よろず覚え帖』朝日新聞社	【依田は遂に刀を引寄せてすつと座をたつた】208頁

江戸	松平壽子	堀田正倫の姉 岩見浜田藩主松平 武聡夫人	司馬遼太郎『花神』中 新潮文庫	【益田口以来、浜田藩はつぎつぎに敗戦したが、敗戦することに現場現場の指揮官は自刃していったように、こんどは本城のそばまで迫った長州軍に対し、城をみずから焚くことによって藩そのものが自決しようということで、形式を全うしようとしたのである。その形式の遂行者は、筆頭家老千二百石の尾関長門という老人であった。かれは天守閣の基部に火薬を詰め、藩主夫人に退去を乞うた。藩主夫人は、久子といい、二十を越してはどかない。下総(千葉県)の佐倉藩主堀田氏の娘で、城下の町人どもはひそかに「御馬さま」と申しあげていたほどに、顔がながかった。彼女は尾関に対し、切り口上で、「殿さまは御病中ながら、この御城の御城主であられるゆえ、御城とともに御運を決められるではありません。わが身は婦女であります、しかし殿さまとともに御城にとどまります。そこもたちはそのような気がかきせず、防戦せよ」といったが、尾関は言葉をつくして説得した】390頁
江戸	佐波銀次郎	佐倉藩士	川嶋保良『西周夫人升子の日記』青蛙房	【ここに書かれている佐波銀次郎(日記には銀二郎)が、升子の日記の十二月十六日に結納品を持参し、西周側の仲人として登場する佐波銀次郎である】32頁【西周はこの年の五月、佐波銀次郎厄介名義で番書調所へ勤めているから、佐波が二年にわたって蝦夷地を調査中、手塚律蔵を介して佐波の名義を借用したと思われる】35頁
江戸	佐波銀次郎	佐倉藩士	佐波正一、佐波薫、中村妙子『三本の苗木』みすず書房	【父方の曾祖父、佐波銀次郎はもと佐倉藩士藤井八郎左衛門の次男で、藤井銀次郎通任といったが、その頃家系が断絶していた佐波家の家名を故あって継いだものである】4頁 【祖父、佐波一郎は藤井喜一郎の次男として、安政元年(一八五四)十一月に江戸小川町で生まれており、もと藤井○(金偏に斬)次郎と称したというが、この頃の記録にはいくつかの食い違いがあつて生年や旧名には定かでない点もある。いずれにしても、その後、叔父銀次郎の養子となり、その際改名して、明治の初めにはすでに佐波一郎を名乗るようになっていたようである】7頁 【○(金偏に斬)次郎の長姉の淑は、依田百川に嫁しているが】7頁
江戸	小永井五八郎	後に小舟・佐倉藩士 平野重久の弟	土居良三『咸臨丸海を渡る』未来社	【軍艦操練所勤番下役の小永井は咸臨丸に公用方吉岡勇平の部下として乗組んだ】452頁 【小永井五八郎、名は岳、字は君山又小舟と号し、通称を八郎といった佐倉藩士平野知秋の弟で、平野氏は世々佐倉の藩老であつたが、彼の兄弥五郎も田中從吾軒と称し、経書に通じ詩文を能くした】452頁
江戸	鑄木仙安	佐倉藩医	谷沢永一『向学心』新潮選書	【父は浅草で小永井小舟が開いていた漢学塾へ通わせた】34頁
江戸	鑄木仙安	佐倉藩医	二宮陸雄『種痘医北城諒斎天然痘に挑む』平河出版社	【佐倉藩では、鑄木仙安による江戸藩邸での「御姫様方種痘至って軽く済まされ」の報告に基づいて、嘉永二年十二月二十三日に次のような大目付触が出され、藩内に牛痘種痘を行なう方針が布告された】358頁
江戸	藤倉元秀	佐倉藩医	網淵謙錠『聞いて極楽』文藝春秋	【幕末に老中をしていた小笠原老岐守長行は、側室美和子(松田氏)にできた子供を捨丸と名づけ、誕生(慶応三年十一月二十日)の翌日、蘭医藤倉元周に預けた。そしてみずからは老中職を辞して、奥羽列藩同盟に参加すべく会津に走り、翌慶応四年三月から明治五年七月まで、各地を転々として行方をくらましていた。その間、子供の捨丸は養父に連れられて千葉県佐倉在の将門郷に移り、そこで育てられた】199頁 【捨丸こと後年の海軍中将小笠原長生の身上話である】199頁
江戸	宮崎重富	佐倉藩士	徳積陳重『法窓夜話』岩波文庫	【山本大膳という人が、享保の五人組帳前書を増補修正して百四十五箇条よりなる五人組規則を定めた】164頁 【我輩の蔵する山本大膳五人組帳は、佐倉の藩士宮崎重富氏が天保十年に手写して愛蔵しておったもので、同氏が巻尾に識している語を見ても、当時山本大膳五人組帳が世に重んぜられていた一斑を知ることができる】164頁
江戸	おはん・八重	雷電為右衛門の妻 *新羅愛子『千葉県 女性人名辞典』青史 社、松裏善亮『さくら の女二四人』による と、雷電の妻は「うめ」 とある。新羅氏による と、「うめが本名とす ると、八重は奉公して いるときの源氏名で あったか、知れない」	小島貞二『雷電為右衛門』学芸書林	【江戸にも寛政のその頃、その場所に「天狗さま」を屋号とする、一軒の甘酒茶屋があり、その看板娘のおはんが、鄙には稀な美貌と持ち前の愛嬌で客を呼び、宿場の名物の一つになっていた。旅の雷電が、その店のれんをくぐり、おはんをひと目見たときから、二人の運命は大きくかわる。このおはんが、雷電との間に一女をもうけた、のちの八重夫人である】上112頁 【千葉県佐倉市臼井は、雷電夫人お八重(前名おはん)の故郷である。雷電も何度となく足を運んだ町であり、晩年はかなり長期滞在をしたところでもある。いふなれば雷電にとつては、「第二の故郷」になる】下VI
江戸	おはん・八重	雷電為右衛門の妻 *新羅愛子『千葉県 女性人名辞典』青史 社、松裏善亮『さくら の女二四人』による と、雷電の妻は「うめ」 とある。新羅氏による と、「うめが本名とす ると、八重は奉公して いるときの源氏名で あったか、知れない」	もりたなるお『力人』新潮社	【雷電が声を掛けると、姉様様りの八重が顔を上げて振り向いた。甘酒茶屋「天狗さま」の生家で働いていて、雷電の妻に迎えられた頃から見ると、八重も年老いた】256頁 【臼井でも雷電の名は高かったが、相撲に関わっていたときと違い、物見高い人が寄ってくることはない。雷電の老後を静かに見守るといった様子で、老夫婦二人と猫一匹の静かな暮らしであった】257頁
江戸	筆野	佐倉にゆかりのある 老女	篠田鈺造『幕末明治女百話』上 岩波文庫	【私の勤めた御殿には、老女が三人ありまして、篠崎さん、溝口さん、筆野さんと申しました。私は筆野さんの御世話を受けて、一通り御殿奉公を憶えたのです。この筆野さんという御方は、なかなかのやかましやで、威い御方さまでした。佐倉の堀田さまの御藩中で、十八歳の齢に御縁付になり、お子さまが一人あつたとやら】128頁 【老女筆野さんに叱られたお話を一つしておきましょう。老女のしっかりしているところは、こういう風なんです。西丸大奥なんかは、得て有勝ちの、奥女中同士の仲悪、妬みそねみのいたずらから、互いに脅しこをするので

明治・大正 明治・大正時代を舞台として描いた作品
佐倉という文字が出てくる作品

明治・大正	佐倉		杉本章子『残映』 文藝春秋	【まず、寛たちの強請に応じるふりをして、どこかへおびき出す。そこで、五千円耳をそろえて渡し、阿片を取り戻して、手打ちの乾杯に青酸加里入りの酒を飲ませて殺すことにした。しかし、遠くへ誘い出しては寛たちが怪しむだらうから、近間の小津屋を選んで、八月三十日に落ち合ったというのである。「宿帳に、 下総佐倉は井野の唐物屋 と偽ってな」鑓太郎は話を引き取り、佐倉の井野まで足をのびしたのだと言った。撫で分け髪は、けつと笑い、用心棒をしている土族の一人がその出なのを思い出して書いたのだ、と明かした】172頁
明治・大正	佐倉		アーネスト・サトウ編著 庄田元男訳『明治日本旅行案内』下巻 平凡社	【 白井 (旅宿、☆ 太田屋 は広くて快適、奥座敷からは良い川海老を産する沼がよく見える。左手には 菊屋 あり)は 印旛沼南岸 に位置するかなり大きな宿場町である。この先の 佐倉の宿 は外国人を歓迎しないことで知られているので当地で宿泊することを薦める。道はしばらく湖の辺を進みやがて丘を登って 人口六七〇〇人の佐倉 (旅宿、 米屋 、 吉田史郎 、 料理屋 、 飼葉屋)に至る】332頁
明治・大正	佐倉		森鷗外「後北游日乗」『鷗外選集』第二十一巻 岩波書店	【十二日雨ふる車を備ひ 印旛沼 の渡口瀬戸を過ぎて午後五時 佐倉新町 なる 泉屋 に着きぬ】17頁 【 佐倉 は繁華ならねど宇都宮に優ること三つあり俗の淳朴なる食饌の精き娼妓なき是なり】17頁
明治・大正	佐倉		伊藤左千夫「春の潮」『左千夫全集』第二巻所収 岩波書店	【仕方ないから 佐倉 へ降りる】300頁
明治・大正	佐倉		正岡子規「總武鐵道」『子規全集』第十三巻 講談社	【やがて 佐倉 なり汽車此處にて盡く此道にては總て驛夫の驛の名を呼ぶ者無し停車場より 佐倉 の町迄野道二三町許なり新道の泥深き両側に茶店など總て新らし 葉 掛けて 風防 くなり 冬構 佐倉 の町は平野の中に一段高き處なりと見るに 霜枯 の 佐倉 見上ぐる 野道 かな 木陰寒き阪を上りて左は土族町ならん右に折れて通り町に出づ一時間許り前に都を見たる眼には何もかも淋しき心地す町を少し入りて 清國捕虜舎 と書きたる門見ゆ前には兵士劍把て護り門内に青竹の矢来を繞らして藁ぶきの家立てり 海隣寺 といふ寺なりとぞ萬里の天外に来て神州の粟を喰ふ彼等の心の推測られて哀れなれ かゆ という物をすすりて 冬籠り 阪上 より 印旛沼 を見るべし阪を下れば掘あり堀の内は 昔の城 にて今の營所なりとか 常磐木 や 冬 されまざる 城の跡 古沼 の境もなしに 氷 かな もとの道より引き返して 停車場 に歸る途に何處の嫁か馬に乗りて親父とおぼしき人の後より随ひ行くに逢ふ馬に乗る嫁入り見たり年の暮】607頁
明治・大正	佐倉		尾崎紅葉「銚子紀行」『紅葉全集』第十一巻所収 岩波書店	【(*明治三六年四月二十三日)抵 佐倉 丘の辺の小松裸木の中に雑木の色々に芽立ち、或は白く、赤く、或は淡く黄に、浅く緑に、相錯れる、秋の野の錦にも遜らず。人は賞せざれども、見るに捨て難し。木々の皆低くそれぞれに時を得顔なるに、独り竹花の愁多きを憐む。佐倉にて中食すとて、家人の折詰取出すを覗きて、燦として春の花有りちらし 酢甘ね ちと云う菓子?包を買ふ。一個六錢、大さ盆の如し。其状の醜怪なる寧ろ近く可らず】186頁
明治・大正	佐倉		国木田独歩「書簡」『国木田独歩全集』第五巻所収 学習研究社	【(*明治三十八年)四月二十四日国木田治子宛千葉県銚子より】482頁 【 佐倉 の 停車場 に着くと、お茶におすし、おすしにお茶と気のない声で商人が車窓の前に来た、せめて茶でも飲めと一びん三錢五りん、サア其湯の熱いこと、それを飲むと生きかへるやうな気がして、二三杯つむぎまに飲むだ】483頁
明治・大正	佐倉		水野葉舟「水国の初秋」『沼の思ひ出』所収 葉舟会	【「此処に学校は?」「中学だけだ。 佐倉 の 殿様 が自費で建てたのだ。この 殿様 という人は教育には余程熱心な人でね、 農事試験場 を造ったり、東京にも此処出身の学生の為めに、 寄宿舎 が建ててある。】13頁
明治・大正	佐倉		水野葉舟「沼の思ひ出」『沼の思ひ出』所収 葉舟会	【 佐倉 で汽車を降りた時には、もうずっと日が傾いた時刻になっていた】61頁
明治・大正	佐倉		水野葉舟「開墾の記録」『下総開墾』所収 葉舟会	【八衛門の話の中にあつた浜街道というのは、どうい道すじかと聞くと、浜、即ち作田、松ヶ枝、今泉、片貝方面からくる九十九里海岸の魚売りが、 佐倉 に生魚をもって行く道を言ったものである】152頁(時代不詳)【 佐倉 の城下まで行き、役人に届けて検死に来て貰うことにした】157頁(時代不詳)
明治・大正	佐倉		小杉健治「花の境」 中央公論社	【お良の父も 旧佐倉藩士 であつたから、徳川家の縁戚に当たるお客に興味を覚えたのだ】28頁 【「お良は素直に「父は 佐倉藩士 でした。没落した家を助けるためには仕方なかったのです」】32頁 【故郷の 佐倉 から柳橋に移った頃、そして新橋に出ていた頃のことが走馬灯のように頭の中を駆けめぐった】70頁
明治・大正	佐倉		江見水陰「江原台の土器塚」『探検実記地中の秘密』所収 博文館	【 佐倉 町から半里ばかりの 江原台 という処】70頁
印旛沼という文字が出てくる作品				
明治・大正	印旛沼		水野葉舟「水国の初秋」『沼の思ひ出』所収 葉舟会(明治三九年発表)	【市街を北の方へ 山崎 という村をさして急いだ。 市街の端 になると急に 坂 がある。坂の上に立って見ると、 印旛沼 は早や眼前に白く光って居る】14頁
明治・大正	印旛沼		水野葉舟「沼畔より」『沼の思ひ出』所収 葉舟会(明治四四年発表)	【自分は 土浮 の渡しを渡って、瀬戸に上がった。鈍い鉛色に濁んだ水に日が反射して、重い、どんよりとした、寂しい色に見えた。この色だ、自分が折りふし、東京の中で突如として胸に思い浮かべられて来るのは・・・】50頁
明治・大正	印旛沼		水野葉舟「水郷の思い出」『沼の思ひ出』所収 葉舟会(大正五年発表)	【私は今、旅の思い出を書き続ける。初めて 印旛沼 の水の色を見た時には、水の死んだ色を感じた】26頁
明治・大正	印旛沼		水野葉舟「沼の思ひ出」『沼の思ひ出』所収 葉舟会(大正一二年発表)	【その時に、初めてあの 古い濁った銀の錆びたような沼 の水を見たのである。恐ろしい鈍い光の反射であった。陰鬱な灰色、それはおそらく空の雲の色が映っていたのだろう。しかし、私は死んだ水を見たように、軽い脅えを感じてそこに立ち止まっていた。 沼 は全く大きなもので死骸のようであった】61頁

明治・大正	印旛沼		田山録弥(花袋)「ある日の印旛沼」『定本 花袋全集』第二四巻所収 臨川書店(大正九年発表)	【沼を取廻いた丘もさう大して高くなく、そこに生えた樹木もさう深く繁つてゐないので、割合に潤く遠く地平線が連つて眺められた。樹、丘、人家、それに連つて、ところどころ雲切れのしたさびしい夏の空が、さながらそつと持つて来て捺したやうに、静かに、錆びた沼の水の面に映つてゐるのを私は目にした】263頁 【私は曾て耳にしたこの古沼の畔に住む人達の生活を思はないわけには行かなかつた。一種のさびしさと暗いところを持つたその人達の生活を・・・】266頁
明治・大正	印旛沼		田山録弥(花袋)「印旛沼にて」『定本花袋全集』第一六巻所収 臨川書店 (大正一〇年発表)	【錆びた色をした沼ではあつたけれども、またそれほど心を惹くに足る眺めではなかつたけれども、それでも暫しの間そこを離れることはできなかつた】174頁【でも、沼を渡れば、もうすぐ佐倉じゃありませんか】193頁
明治・大正	印旛沼		香取秀真『随筆ふいご祭』 学芸書院	【私の家で芥川龍之介君や小杉未醒君や道楽会の人々と初めて会つて印旛沼の鴨を食つて別れ行く】172頁
明治・大正	印旛沼		『香取秀真全集』 中央公論社	【(*明治三十四年)印旛沼にて水鳥を捕ふる事を思ひいでて頭頰歌二つやつぎりの鳥網をはるといでゆく吾が背、月影に衣のそでに霜白く置くのがれくる雁の羽音のしげき月夜を、手賀沼に鴨とる人の袖こぼるらし】246頁 【(*明治三十四年)五月三日下総国印旛沼のほとりなる吉高村に富井宗之助を訪ふ 伊爾波の湖ゆふべ小波にくがねかもちるとし見れば月たちのぼるいにはのうみ北に注ぎて利根に入る出洲の葦原ひばりなくなり】248頁
明治・大正	印旛沼		吉植庄亮「百姓記(抄)」『土とふるさとの文学全集』家の光協会	【開墾のことが心に染り始めたのが大正十三年、調査研究に乗り出したのが十四年、愈々工事に着手したのが、十五年一月三十一日であつた】284頁
佐倉ゆかりの人が出てくる作品				
明治・大正	堀田正倫	最後の佐倉藩主	吉村昭『白い航跡』上 講談社	【佐藤は、佐倉藩主堀田正倫のもとにおもむいて上京する旨の挨拶をし、下旬に門人の大滝富三、井上寅三と駕籠かきの辰五郎を連れて佐倉を離れた。東京についた佐藤は、渋谷にある堀田藩の下屋敷に入り、そこでしばらくすごした後、相良の用意した下谷美倉橋通りの中屋敷に移つた】130頁
明治・大正	木村隆吉	元佐倉藩士	司馬遼太郎『燃えよ剣』下 文藝春秋新社	【「木村(隆吉)君、わるい日に出陣だな」旗本は、苦笑した】290頁
明治・大正	木村隆吉	元佐倉藩士	古賀志郎『大鳥圭介』 彩流社	【四月十一日夜半、圭介は元佐倉藩士木村隆吉と下僕の虎吉を伴い、手荷物には僅か一個の行李を携えて駿河台の屋敷を出た】32頁
明治・大正	依田学海	旧佐倉藩士・漢学者 *江戸時代に再掲	萩原延壽『陸奥宗光』 朝日新聞社	【旧佐倉藩士で、儒学者の依田学海は、幕末期には、佐倉藩の江戸留守居役であつたが、その後は、公議所の開設(明治元年十月)にともない和歌山県藩執政として東京に向つた伊達五郎宗興と、全く同じ道を進むことになり、同僚として相互に親交をふかめるに至つた。公議所は、やがて官制改革による集議院の設置(明治二年七月)と共に移管され、依田と宗興は、ともに集議院議員となつた。このとき二人は、それぞれ佐倉藩および和歌山藩の権大参事であつたが、宗興は、公議所時代に東京に留議員幹事であり】318頁
明治・大正	依田学海	旧佐倉藩士・漢学者 *江戸時代に再掲	森鷗外『キタ・セクスアリス』 新潮文庫	【文淵先生の内へ漢文を直して貰ひに行くことにした。書生が先生の書齋に案内をする。どんに長い物を書いて持つて行つても、先生は「どれ」と云つて受け取る。朱筆を把る。片端から句読を切る。句読を切りながら直して行く。読んでしまふのと直してしまふのと同時である】63頁 *文中の文淵先生が学海のこと
明治・大正	依田学海	旧佐倉藩士・漢学者 *江戸時代に再掲	森鷗外『百物語』『鷗外全集』第九巻 岩波書店	【鬚の白い依田学海さんが、紺緋の銘撰の着流しに、薄羽織を引っ掛けて据わつていた】131頁
明治・大正	依田学海	旧佐倉藩士・漢学者 *江戸時代に再掲	坪内逍遙『柿の帯』 中央公論社	【(*学海の名は朝宗、字は百川、後にはこの字を通称にしていた)】543頁
明治・大正	依田学海	旧佐倉藩士・漢学者 *江戸時代に再掲	泉鏡花『薄紅梅』 中央公論社	【当時文界の老将軍一佐久良藩の碩儒で、むかし江戸のお留守居と聞けば、武辺、文道、両達の依田学海翁が、一夏土用の日盛の事・・・生平の揚羽蝶の漆紋に、袴着用。大刀がわりの杖を片手に、芝居の意休を一ゆがきして酒然と灰汁を抜いたような、白い髻を、爽にしごきながら、これ、はじめての見参】2頁

明治・大正	依田学海	旧佐倉藩士・漢学者 *江戸時代に再掲	森銚三著小川昌洋編『新編明治人物夜話』岩波文庫	【漢文においては、明治年間有数の作家の一人に数えられる。学海翁は漢学者だといったが、あるいは漢文家であったといひ換えた方が、一層適切かも知れない。しかもまた翁に珍しいのは、漢文家にして、国文家も兼ねたことであった】39頁 【漢学島の学海翁が、小説を書くということは、当時の人々の眼を見張らせたのであるが、延いてはそれが、明治年間における小説家の社会的地位を高からしめる一因ともなった】40頁 【しかしながら翁の人物は、何といつても儒教の精神によって出来上がっていた。翁は己を没却して、時代に追随しようなどとはしなかった】41頁 【学海翁は人間が明るくて、開放的であった。紹介状などは持参しなくても、来訪する人々を喜んで引見して、齢を忘れて快談した。人に対して城府を設けることをせず、時には癡癡を爆発したりしても、その跡には何のわだかまりもなく、そうした人々から親しまれた。しかし、翁が文壇に重きを成したのは、明治二十年台の前半期に在ったと見てよいだろう。時代の推移と共に、翁と時代の間にずれが生ずるに至ったのは、止むを得ないことであり、自然主義の文学が起こったりしてからは、翁はもう文壇外に押し出された形だった。しかし文壇が己を重んじようが、疎もうが、更に意を介しなかった】41頁 【翁の著書で、最も世に歓迎されたものに『譚海』三巻がある。近世の人物の逸事その他を漢文で叙して、興味のある読物を成しているが、漢文家の弊として、文章を重んずる余りに、事実の真を伝えようとするのが二の次になっているところなどのあるのが惜しく】42頁 【翁は誰れよりも先に、露伴を認めたのであるが、後には翁は、抹香臭い露伴よりも、どこまでも江戸っ子に出来上がっていて、竹を割ったような気象の持主だった紅葉に、一層の好感を寄せていたと思われる。それで『金色夜叉』を読んでは、『紅葉山人に与ふるの書』を書き、紅葉の歿後には、その伝を書いている。紅葉の方でも、文章家として、また人間としての翁を重んじた。その気持が伝えられたものと見てもよからうか、弟子の鏡花も、翁には好感を寄せた。その作の『薄紅梅』には、特に翁を登場せしめて、その風貌を伝えている】43頁 【現行の人名辞書その他には、翁を演劇の改良者として載せている。私はその一事に不満を持つ。逍遥の著『柿の華』の中に、翁について述べた一文があるが、逍遥の翁に対する見方にも、是正を要するものがある】
明治・大正	依田学海	旧佐倉藩士・漢学者 *江戸時代に再掲	森まゆみ『鷗外の坂』新潮文庫	【この高台からの風景を、依田学海が描いた墨絵が、鷗外邸あとの文京区立鷗外記念本郷図書館にある。左手に谷中五重塔が見える】258頁
明治・大正	依田学海	旧佐倉藩士・漢学者 *江戸時代に再掲	辻井喬『虹の岬』中央公論社	【父親（*本多清助）の仲間であった漢学者、依田学海が書いてくれた母親本多かねの墓碑銘が思い出された】67頁
明治・大正	依田学海	旧佐倉藩士・漢学者 *江戸時代に再掲	中野翠『会いたかった人』徳間書店	【依田学海という人は当時の文学状況の要所要所でやたらと顔を出す、気になるじいさんなのである】217頁
明治・大正	浅井忠	佐倉藩士浅井常明の子・洋画家	夏目漱石『三四郎』角川文庫	【『深見さんの水彩』は普通の水彩のつもりで見ちゃいけませんよ。どこまでも深見さんの水彩なんだから。実物を見る気にならないで、深見さんの気韻を見る気になっていると、なかなかおもしろいところが出てきます」と注意して、原口は野々宮と出て行った。美禰子は礼を言ってその後影を見送った。二人は振り返らなかつた。女は歩をめぐらして、別室へはいった。男は一足あとから続いた。光線の乏しい暗い部屋である。細長い壁に一列にかかっている深見先生の遺画を見ると、なるほど原口さんの注意したごとくほとんど水彩ばかりである。三四郎が著しく感じたのは、その水彩の色が、どれもこれも薄くて、数が少なくて、対照に乏しくて、日向へでも出さないと思ひ立てないと思うほど地味にかいてあるという事である。その代わり筆がちっとも滞っていない。ほとんど一気呵成に仕上げた趣がある】215頁
明治・大正	浅井忠	佐倉藩士浅井常明の子・洋画家	夏目漱石『それから』角川文庫	【中に置いた湯呑には、京都の浅井黙語の模様画が染めつけてあった】165頁
明治・大正	浅井忠	佐倉藩士浅井常明の子・洋画家	司馬遼太郎『坂の上の雲』二 文春文庫	【ことしの一月には、画家の浅井忠が渡欧することになって、その送別会がこの子規庵でひらかれた。子規は病床ではしゃいだ】307頁
明治・大正	浅井忠	佐倉藩士浅井常明の子・洋画家	塩川京子『正岡子規の面影』京都新聞社	【子規が浅井と出会ったのは何時のことか不明である。明治二七年に浅井が不折を紹介しているところから、それ以前であろう。また子規も浅井も当時、上根岸の住人で、隣人に近い間柄であった。浅井は子規よりおよそ十歳位年長、子規は浅井を常に「先生」として遇し、敬意を表していた。子規が先生と呼ぶ人は少ない、この先生という呼称の中に子規の浅井に対する気持が十二分に窺われる】111頁
明治・大正	浅井忠	佐倉藩士浅井常明の子・洋画家	秦恒平『月皓く』集英社	【浅井忠を卒業論文にとりあげたいといつごろ私が教授に相談したかよく憶えていないが、言下に賛成され】119頁 【浅井の京都移住に一つの疑問が湧いてきた】222頁
明治・大正	松本順	佐藤泰然の子 江戸時代は良順と称する。林董の兄 *江戸時代に再掲	吉村昭『日本医家伝』講談社	【明治元年八月二十一日早朝、旧幕臣松本良順は、会津藩士松平容保と若松城の一室で対していた】216頁
明治・大正	松本順	佐藤泰然の子 江戸時代は良順と称する。林董の兄 *江戸時代に再掲	井上靖『グワドル氏の手袋』『井上靖短編集』第三巻所収 新潮文庫	【松本順は、幕末から明治にかけての医家で、志士たちの名の持つような一般性はないにしても、日本医学史にはその名を登場させなければならぬ人物である。たまたま私の曾祖父が松本順の門下であり、単に子弟の関係ばかりでなくそれ以上に深い交際を持っていたので、そんなところから松本順という名は私には親しいものであった】108頁 【松本順・幼名良順、蘭崎と号す。佐倉藩医佐藤泰然次男】109頁 【幼い頃の私の心に、松本順という名前をこの世で最も尊敬すべき人物として吹き込んだのは、曾祖父潔の妾であったかの女である】110頁 【豪いお方だな、その前に行くと、誰でも自然にすうと頭が下がってしまう。豪いお方というものは違うもので、おじさんのことはお弟子さんだから、いつも潔、潔と呼び捨てにおっしゃっていたが、この私のことは、奥さんや奥さんやお呼びなされた私にこうした話を何回聞かされたか判らなかつた。松本順のお供をして見に行つた菊人形や両国の花火の話をする時、彼女は一度は必ず奥さんやと呼んでくれた松本順の言葉を、あたかもその時の感動を再現するかのように自分の口からも出した】113頁

明治・大正	松本順	佐藤泰然の子 江戸時代は良順と称する。林董の兄 *江戸時代に再掲	黒川鍾信『東京牛乳物語』新潮社	【明治初年に、前章で述べた「良順先生」こと松本良順が、動物性タンパク質、特に牛乳を摂ることが国民保健の見地からも大事であると主張し始めた。それだけでなく、徳川からの禄を失い、生活に困っていた義理の伯父、阪川當晴を説得して麹町区麹町に牛乳搾取場を開かせた。この時、良順は牝牛六頭を寄贈して資本とさせ、また、得意先として陸軍病院などを紹介している】94頁
明治・大正	佐藤尚中	順天堂第二代堂主	吉村昭『白い航跡』上 講談社	【相良は、佐倉順天堂で学んでいる間、師の佐藤舜海のもたらす言葉から世界で最も秀れているのはドイツ医学であることを感じていた。舜海が蘭方医と言われながらも、ドイツ医学に強い関心をいだいているのに気づいていたのである。それを裏づけるように舜海の養嗣子である佐藤進は、ドイツへ留学するために六月末にアメリカ商船で横浜を発っている】113頁 【相良の胸に闘志が盛りあがった。大勢を占めるイギリス医学採用の風潮をあくまでくつがえし、ドイツ医学を主流とすることが日本医学の飛躍的な進歩をうながすものだ、と確信した。しかし、それが容易ならざる大事業であることも熟知していた。政府内で最も発言力の強いのは旧薩摩藩出身者で、かれらによってすべてが動かされていたと言っても過言ではない。イギリスは薩摩藩と親密な関係にあり、イギリス医学を日本の医学の主流とする気運は薩摩藩出身者の意向を反映したものである。イギリス医学を排してドイツ医学を採用するのは、薩摩藩閥と対立することを意味する】115頁 【すでに明治政府は、ドイツ医学採用を前提とした教育改革の態勢をかためていた。ウイリスの主宰していた医学校兼病院は解体されて、大学東校とすることも決定していた。その主宰として、ドイツ医学の採用を成し遂げた相良知安と岩佐純の推挙で佐倉順天堂の佐藤舜海が選ばれた】130頁
明治・大正	佐藤尚中	順天堂第二代堂主	渡辺淳一『花埋み』新潮文庫	【入院して二日目にぎんは初めてこの佐藤尚中の診察を受けた。尚中は小柄だがひきしまった顔に眼光鋭く、髪のはほとんどは白髪になっていた】54頁
明治・大正	佐藤進	順天堂第三代堂主	吉村昭『白い航跡』上 講談社	【兼寛はうなずき、「それで佐藤先生の治療法は？」と、たずねた。「なにもかも驚きました。見たこともない治療で・・・」男の眼に輝きがやどった。「どのように・・・」兼寛は、かれの眼に視線を据えた。「傷口が膿んで壊疽をおこし、このままでは命が絶えると思われる手負いの者の手足を、ためらうこともなく切断しました。鋸を使うのには仰天しました。西洋の消毒液をつかい、薬を服用させ、それによって命が助かった者がかなりおります】42頁
明治・大正	佐藤進	順天堂第三代堂主	渡辺淳一『光と影』文藝春秋	【佐藤進という人は佐倉順天堂で有名な順天堂医院の後継者で、日本で初めて独逸に留学し、正式に独逸医学を修めた人であり、その外科的技術は当時並ぶ者ないと云われていた人であった。彼は自分が養子となった順天堂医院に勤めていたが、西南戦争が始まり、大阪臨時病院に熟練した外科医が不足していると聞くと、自ら医院を一時捨てて陸軍病院に志願したほどの熱血漢であった陸軍省では彼のこの義勇奉公の精神を認め、直ちに陸軍医監とし、臨時病院副院長に任命したのである】14頁
明治・大正	佐藤進	順天堂第三代堂主	邦光史郎『三菱王國(下) 巨人 岩崎弥太郎』下 集英社文庫	【その時、医師の佐藤進が入ってきた】480頁
明治・大正	佐藤志津	佐藤尚中の子	林えり子『続 結婚百物語』河出書房新社	【志津校長は自分の着物を脱いで学校に着せたいいわれたという】248頁
明治・大正	佐藤志津	佐藤尚中の子	長谷川美智子『女医第2号生沢久野の生涯野菊の如く』健友館	【能力がありながら貧しさゆえに道を阻まれている女性たちのために助力を惜しまない志津子は、瑞子の姿を見て、すぐに自分の着物や洋服、帳面、鉛筆、教科書などをさりげなく差し出した】89頁 【志津子は、実習中の瑞子の月謝を支払い、瑞子が勉学に没頭できるようあらゆる後押しを惜しまなかった】90頁 【久野は受験しなかった瑞子を思うと、夢にまで見たドレスを買う気にはなれない】90頁【内務省医籍に登録された久野の登録番号は一六二二一。公許女医第二号の誕生である】90頁 *志津は私立女子美術学校長となり、明治の女子教育に尽くす
明治・大正	西村茂樹	旧佐倉藩士	宮本百合子『繻子のズボン』『宮本百合子全集』第一二巻 新日本出版社	【佐倉藩で江戸暮らしをつづけていた母かたの祖父】130頁 【曾祖父は堀田の青鬼と綿名された繪師であった由。息子は体が弱くて、父である青鬼先生に佐分利流の稽古をつけられて度々卒倒するので、これは武術より学問に進む方がよからうということになって、二十歳前後には安井息軒についていたらしい。やがて洋学に志を立て、佐久間象山の弟子になって、西洋砲術の免許を得たりしている】130頁
明治・大正	西村茂樹	旧佐倉藩士	戸沢行夫『明六社の人々』築地書館	【佐倉藩出身の西村は、明治五年(一八七二)三月に印旛縣(現在の千葉県北部)権参事を辞任しており、翌年十一月に文部省に奉じるまでの空白期間にあった】8頁
明治・大正	西村茂樹	旧佐倉藩士	司馬遼太郎『翔ぶが如く』四 文藝春秋	【かれ(*森有礼)は、そういう理由で明六社を興し、法学者による啓蒙運動をはじめた。この結社の同人は、はじめ十人であった。福沢諭吉、西周、加藤弘之、中村正直(数字)、杉亨二、箕作秋平、同麟祥、津田直道、西村茂樹である。この大半が、旧幕府の洋学派の出身であった】83頁 【明六社がやる啓蒙運動は、この結社が刊行する「明六雑誌」を通じておこなわれたが、一方、演説会による世間への影響も見のがせない。「明六雑誌」は創刊の明治七年三月以来、毎月二回か三回刊行されたが、初年度は毎月平均三二〇部売れたという。明治初年の読書人口からいえば、驚異的な売れゆきといっている。しかしながら、宮崎八郎が上京した明治八年夏には、この雑誌は早くも危機に在った。「この六月に政府が発布した議院法および新聞条例に触れるのではないか」という声があり、福沢諭吉の提案で廃刊の議が出ていた。福沢の意見は政府から弾圧をうけて服従するよりも廃刊するほうがよい】83頁
明治・大正	手塚律蔵	英学者	川嶋保良『西周夫人升子の日記』青蛙房	【手塚律蔵は、升子の日記に、しばしば「手塚兄様」「瀬脇兄様」として出てくる】36頁
明治・大正	西村勝三	西村茂樹の弟	高見順『日本の靴』『高見順全集』第十巻 勁草書房	【その頃、廃藩置県による武士の失業者が全国に充満していたが、西村が嘗って仕えていた佐倉藩でも、生活の道を失った武士の救済に腐心していた】133頁

明治・大正	西村勝三	西村茂樹の弟	松本和男編『歌人 中原綾子』中央公論事業出版	【勝三は新しい時代に即したいろいろな事業計画を試みたが、ことごとく失敗に終わった。しかし、これらはすべてのちの製靴、製革、耐火煉瓦の事業を成功させる土台となった】705頁
明治・大正	渡辺暢	旧佐倉藩士	東山千栄子『新劇女優』学風書院	【私の父は渡辺暢と申しまして当時司法官でしたが、下総佐倉の家老で代々城代を勤めました】40頁
明治・大正	津田仙	佐倉藩士小島善右衛門の四男幕臣津田家の養子となる。津田塾大学の創立者である津田梅子の父	勝海舟『増補 海舟座談』岩波文庫	【海舟先生に不断近接しおられたる方々より、先生歿後一々聴き取り、そのま筆記しおきたるを、ここに附録す】221頁 *その一人に津田仙がおり、その話が掲載されている。ただし、目次には「津田仙君」とあるが、文中(253頁)では「津田仙吉」となっている。文中の文字が誤記で、その話が海舟についての思い出話だから、文中からは津田仙とはわからない。
明治・大正	津田仙	佐倉藩士小島善右衛門の四男幕臣津田家の養子となる。津田塾大学の創立者である津田梅子の父	クララ・ホイットニー著一又民子他訳『勝海舟の嫁クララの明治日記』上 中公文庫	講談社【今日、津田氏が、お庭に薔を摘みに来るように招待してください】187頁 【津田氏がお庭で私たちを出迎え、とてもお喜びになった様子で、英国風の家に招き入れてくださった。それはとても小さな家で、お蔵の上に建てたものだった。長い馬車道が門と花園まで続き、向こうには畑、池、丘、竹林などがあつた】188頁 【梅子というお嬢さんは今アメリカで、たしかランマン夫婦の家にいらいしやる。ジョージタウンの学校に通っておいでさうだ。十一歳だが、たった五歳の時にアメリカに行かされたので日本語がしゃべれない。とても熱心なクリスチャンだということだ。日本に戻ったら苦労なさるだろう】191頁
明治・大正	大築尚志	佐倉藩士大築弥市尚忠の子・保太郎	川嶋保良『西周夫人升子の日記』青蛙房	【升子は挙式の日の安政六年三月二十五日の日記に「大築虎蔵の名を記しているが、これは大築保太郎のことと思われる】35頁 【十月四日晴。今日も吉木来り咄して帰る。住居開し大川端官軍の所という。夕方、大築保太郎来り。沼津行きまる事】154頁*慶応四年 【西夫婦は大築一家、川上冬崖、静岡まで行く今井という人たちと連れ立って沼津へ旅立った】155頁 【十一月二十五日、同居していた大築一家が十七番屋敷に移った】156頁
明治・大正	大築節蔵	大築尚志の弟	川嶋保良『西周夫人升子の日記』青蛙房	【明治三年閏十月十八日、周・升子は東京本所牛御前の大築節蔵宅に招かれている】36頁
明治・大正	大築尚正	大築節蔵の弟	網淵謙錠『狄(てき)』中央公論社	【取調べの結果、賊はロシア人と推定されたので、大沢官・大築尚正を函泊のロシア兵営に派遣し、デ・ブレラドヴィッチに届け出た。ロシア側も大いに驚き、いやしくも今回の被害者は開拓使の役人であり、問題がこじれると大きな政治問題に発展する懼れがあるので、いつものような好い加減ぶりは見せず、慎重に探索したらしく、二十八日午後六時、犯人は砲兵隊の兵卒イグナチェフとブーセウの二名であることが判明した。犯人たちは盗んだ金品を隠しおすことができず、すべてを提出したので、楠澳の樺太支庁から出張した羽山権主典と大沢官・大築尚正に贓品を引き渡した】211頁*尚正は慶応元年、ロシア留学。明治になって、開拓使として樺太千島交換条約の事務に携わる
明治・大正	逸見宗助	旧佐倉藩士・立身流兵法者	南條範夫『武道の系譜』文春文庫	【明治六年鍛冶橋内におかれた警視局は、西南戦争の抜刀隊教訓に鑑み、巡査に剣を教えることとし、十二年、広く剣士を求め、梶川義正、上田馬之助、逸見宗助らを師範として採用した】226頁
明治・大正	逸見宗助	旧佐倉藩士・立身流兵法者	戸部新十郎『警視庁時代』『明治剣客伝』毎日新聞社	【かれが名をあげたのは、明治一七年、滋賀県知事だった籠手田安定が関西の剣士十名を引き連れ、警視庁に挑戦してきたときである。警視庁側は関西勢の出来物、高山峰三郎のため総ナメに会ったのを、逸見がでて、ようやく食い止め、面目を施した】25頁 【山岡鉄舟は、「剣客は沢山あるが、逸見だけは真の剣を遣う」と評した。身長五尺四寸だったが、骨組は強剛で、組打ちも強かった。なにより、その見事な稽古ぶりは類がなかった。警視庁中心の一時代、傑出した剣士だった】26頁
明治・大正	逸見宗助	旧佐倉藩士・立身流兵法者	堂本昭彦『高山佐三郎剣道遺稿集』スキージャーナル	【大正天皇が皇太子殿下の御時、品川で矢張り野試合をやった。その時は華族が列せられた。足袋を履いて茅の一面生えて居る所でやめたが、またたく中に茅が踏み倒されて、その時も怪我人が出たが、一々賞与を戴いた。この時です。逸見宗助先生が水練を皇太子殿下に御覧に入れたのは。その時は、皇太子殿下の御座所の直ぐ前で舟の舳先に鎧兜に身を固めた逸見先生が海中に突き落とされる。暫くの間、姿が見えぬ。何しろ重いものを着て居るのであるから、皆心配している。すると十間位向こうで浮き出して、皇太子殿下に礼をした】76頁 *宗助は警視庁流剣術の形をつくった一人。
明治・大正	兼松直廉	旧佐倉藩士	南條範夫『武道の系譜』文春文庫	【その後、警視局が警視庁となったが、その前後に、下江秀太郎、得能関西郎、三橋鑑一郎、柿本清吉、阪部大作、真貝忠鷹、兼松直廉などが、師範として入っている。そして、各流の粹を集めて、警視庁流ともいべき一流を組織しようとしたが、各流が提出した概要は次のごとくである】226頁
明治・大正	林董	佐藤泰然の子・英国公使・外務大臣 *江戸時代に再掲	萩原延壽『陸奥宗光』朝日新聞社	【林は、慶応二年三月に幕府の留学生として英国に渡ったが、帰国(明治元年六月)後は榎本武揚の軍に投じたため、明治三年四月十日まで、約一年の禁錮処分に見えなければならなかった。山東(*一郎、後の直砥)は、林が函館からもどったことを聞いて、早速「明治新塾」の英語の教師として林を招いたのである】320頁 【星亨とともに、林董も、その時陸奥によって集められた若い人材のひとりなのであった】321頁
明治・大正	林董	佐藤泰然の子・英国公使・外務大臣 *江戸時代に再掲	伴野朗『霧の密約』朝日新聞社	【これで、第三者の妨害を気にすることなく、ロシアとの交渉に臨むことができる。林は、深い溜息を吐き出しながら、そう思った。それが彼の掛け値のないところの本音だった。もし、ロシアとの戦いに勝てば、それは外交の勝利であろう、と林は思った。日本がアジアの一小国で終わるか、あるいは世界一流国目指して飛翔できるか。その鍵を握っていたのが、この一日英同盟。だった。その調印が数分後に迫っている。血が昂ぶらないという方が不思議であった。林は気を鎮めた。マッコイ秘書官が入ってきた。「公使、調印の場にご案内いたします】488頁

明治・大正	林董	佐藤泰然の子・英国公使・外務大臣 *江戸時代に再掲	児島襄『日露戦争』第二巻 文藝春秋	【林公使は、直ちに返電し、英国「公衆」はなお「最終の勝利」はロシアのものだと信じている】63頁
明治・大正	林董	佐藤泰然の子・英国公使・外務大臣 *江戸時代に再掲	水木揚『動乱はわが掌中にあり』新潮社	【山県（*有朋）が報告書を前にして「明石というのは恐ろしい男だ」とつぶやいている。日露戦争も終末に近づいた明治三八年（一九〇五年）夏。山県のひざの上には、ロンドン駐在の林公使から外務省を通じて入電した報告書がある。日本と交戦中のロシアには革命機運が燃え上がり、この巨大な帝国は内側から揺らぎ始めた。欧州に駐在する明石元二郎陸軍大佐の工作が効を奏している一報告書はそう知らせていた。その内容は在京英国公使館を通じて陸軍幹部が入手している情報とも一致している。秘密工作員の明石マシーンは、ロシアという名の屋敷にいつの間にか入り込んだブルトラーガーのように、止めどもない破壊活動を始めているというのだ】7頁 【明石は、ロンドンに向いて在欧公使館の司令塔でもある公使、林董の説得を試みた。林は重大だ。下総国佐倉の蘭学医の五男に生れた彼は、幕府の派遣留学生として英国に学び、榎本武揚に投じて函館戦争に参加、維新後、陸奥宗光に誘われて官界に入った】89頁【林は目を開いた。「革命家というのはだね、反政府という点では一致している、いざ行動となると、なかなか協力し合わないものだよ」革命グループを大同団結させるという明石の構想に、一応首をかしげてみせたのである。明石は即座に答えた。「その通りです。私の調べたところでもロシアの革命グループはいくつにも分かれ、お互いに疑心暗鬼です。容易に一致した行動を取ろうとしていない。しかし、もしそのまとまりの悪いグループがまとまったら、どうでしょうか。ロシア皇帝に対する強力な一撃になるのではないのでしょうか」「君の言う通り簡単にまとまるような連中なら、いいのだが・・・」と林は言ったが、その目は明石にやってみろと告げていた】90頁
明治・大正	林董	佐藤泰然の子・英国公使・外務大臣 *江戸時代に再掲	辻邦生『樹の海の声』朝日新聞社	【新年会では榎本の伯父を中心に林の伯父、赤松の伯父などが並び】59頁
明治・大正	佐藤百太郎	佐藤尚中の子・貿易商	ハル・松方・ライシャワー『絹と武士』文藝春秋	【ヘボンには百太郎の両親に息子をアメリカに留学させるように説得し、かくして百太郎は一八六七年、十三歳の年齢でサンフランシスコに向かった】222頁【ニューヨークでは、佐藤は雑貨と日本からの特産品を売る小売店を始めたが、やがて、日本製品に対するかなりの需要が見込まれることから、自ら貿易商社を作ることになった】223頁クララ・ホイットニー著一又民子他訳『勝海舟の嫁クララの明治日記』上講談社【佐藤百太郎氏がアメリカ人の奥様を連れて帰国された。富田氏はとんでもないことだと言われる】64頁
明治・大正	桜川忠七	旧佐倉藩士の子 幫間	福田利子『吉原はこんな所でございました』社会思想社	【幫間の芸の凄いところは、そのスケールの大きい芸を、たった畳半畳の広さでやってのけたことだと私は思うんです。松廻家露八さんは幫間の元祖で、幫間の替え唄、曲芸、物真似、手踊り、落としぼなし、また、桜川忠七さんの獅子舞い、あやつり、富本半平さんの仁王様、喜久平さんの蝙蝠など、底光がして、いまだに芸者衆が思い出して話しています】104頁
明治・大正	桜川忠七	旧佐倉藩士の子 幫間	出久根達郎『古書彷徨』新泉社	【「ハラの中をさげすむようなお人のことは、こっちだって人さまだと思っちゃおりません」「バカのメッキをした利口ものでないとなれない職業なんですよ」忠七はバクチがだいすきであった。あるときイカサマをやって密告され、出頭を命じられた。「なにタイコモチ？ どういう商売だ。ここでやってみろ」検事にさんざんおどされた。それでもお慈悲ですんだ。ある日忠七にお座敷がかかった。本名の浜野夏次郎で名指しである。首をひねりながらあがると、あの折の検事だ。過日の礼におこれという。勝手に芸者四人、お酌三人、たいこもち三人をよぶ。えらい散財だが、相手が悪い。女房を借金のカタにおいても応えねばなるまいとホソを固めたが、正直笑顔がひきつった。ところがお帰りの段になって、一切の勘定がすんでいるばかりか、忠七たち全員に過分のご祝儀、いやお見事。これぞ通人の遊び方。客は忠七の内心ビクビクを看にしたわけだ】190頁
明治・大正	佐藤佐	旧名井上虎三内郷村生まれ	中井義幸『鷗外留学始末』岩波書店	【順天堂主佐藤尚中の養子佐藤佐となった井上虎三も同じ船で欧州に向かった】124頁
明治・大正	花井梅	旧佐倉藩士の子	河竹黙阿弥『月梅薫籠夜』	*金井お糸という名前前で描かれる。出版社は把握せず。
明治・大正	花井梅	旧佐倉藩士の子	真山青果『仮名屋小梅』講談社	*仮名屋小梅という名前前で描かれる。
明治・大正	花井梅	旧佐倉藩士の子	夏目漱石『道草』岩波文庫	【彼の頭の中には自分とまるで縁故のない或女の事が閃いた。その女は昔し芸者をしていて頃人を殺した罪で、二十年余も牢屋の中で暗い月日を送った後、漸と世の中へ顔を出す事が出来るようになったのである。「さぞ辛いだろう」容色を生命とする女の身になったら、殆ど堪えられない淋しみが其所にあるに違いないと健三は考えた】81頁 *或女が梅のこと。柴田青曲の『明治の話題』(91頁青蛙房)にある。
明治・大正	花井梅	旧佐倉藩士の子	川口松太郎『明治一代女』新小説社	*叶家お梅という名前前で描かれる。
明治・大正	花井梅	旧佐倉藩士の子	小沢昭一・宮腰太郎『イケイケどんどん小沢昭一的ころ』新潮文庫	【『明治一代女』の花井お梅は箱屋の巳之吉を殺しますが、これも巳之吉が振りかざした出刃包丁を奪い取ったはずみに男を刺してしまう。しかし、この顛末が読本や芝居になったのであって毒婦と言われちゃお梅は可哀相なんです。なんども力説しますが、彼女たちは当時のマスコミのアレナ犠牲者であります。カワイソーなんだ・・・はっきり言おう、毒婦は毒ガスの百分の一も悪くない！】321頁

明治・大正	花井梅	旧佐倉藩士の子	三好徹『妖婦の伝説』実業之日本社	【現実に起きた事件が、有能な脚色者の手にかかって芝居や映画になると、大向うを喰らせるドラマになる例は多い。「忠臣蔵」などはその典型だが、しかし、そういう例は決して多くない。というよりは、現実も芝居も胸をうつ事件というものはめったにない。では、以下に記述する事件はどうであったろうか。まだ新聞写真のなかった明治時代の半ば、当時の注目を集めた大事件のほとんどがそうであったように、まず錦絵になり、ついで芝居にもなった箱屋の峯吉殺しである】81頁 【お梅は(髪を)取られて一生懸命、男が右の手にしがみついて、力を極めて出刃をもぎ取り、また立ち掛るをウンと突く(略)これは死人に口なしだから、お梅の言い分をそのまま書いたことになる。つまりお梅は、出刃包丁でおどかさされた上、すり抜けようとしたところを、後髪をつかまれたことになる。女性としては、そんな目にあわされては、たまったものではない。必死の思いで相手にしがみつきの、刀をもぎ取る。そして、なおも襲ってくる相手に、包丁をふるって、手込めにされるのを防ぐのは、ほとんど正当防衛といっている】84頁 【お梅は元治元年、佐倉藩士花井専之助の娘として生れた。明治維新は四年後、さらに四年後に廃藩置県となり、一家は上京した。多くの士族がそうであったように、専之助も商売をはじめたが、何をやっても成功しなかった。そうになると、食い扶持をへらすしかない。たまたま近くに住んでいる岡田という職人が専之助に、「養女に貰えませんか。ちゃんと育てますし、女に必要な芸ごとも習わせますから」とお梅を貰いにきた。その上、いくばくかの支度金も出しましょう、という。要するに、金で買おうというのである。司法卿の江藤新平がフランスの民法をお雇い外人に邦訳させていた時代で、父親が承知すればそれでよかった。専之助は多少迷ったが、岡田にお梅を渡した。岡田が仕込んだのは、芸妓に必要な芸技ばかりであった】89頁 【これまでの記事には出ていないが、お梅には荒物商の録太郎という兄がい
明治・大正	香取秀真	金工家・歌人	芥川龍之介「東京田端」『芥川龍之介全集』第九巻所収 新潮社	【庭木に烏瓜の下がったのは鑄物師香取秀真の家】263頁
明治・大正	香取秀真	金工家・歌人	近藤富枝『田端文士村』中公文庫	【陶芸家板谷波山は、芸術村田端の元祖とも言いたい人である。もし彼がここ西台通り512番地に窯を築かなかつたら、果たして絢爛たる才能の主たちが、後にあれほど集まったであろうか。波山がいなければ、鑄金家の香取秀真はこなかった。従って、芥川龍之介と秀真の親密な関係は生まれず】13頁 【鑄金家香取秀真の家は緑が多く、その間に烏瓜が点々となっているようすを、いつも龍之介はめでていた。そして秀真を、烏瓜の先生とか、隣の先生とか呼んで、田端時代を親しんだ】113頁
明治・大正	津田信夫	旧佐倉藩士津田長人の子・金工家	『香取秀真全歌集』中央公論社	【氷りあし沼つとりこし水鳥を贈らば君が故郷しめむ】217頁 *大正九年、手賀沼で捕れた「なが」という川鳥を同郷の人津田信夫君に贈る
明治・大正	伊東忠太	建築家 一時期、佐倉に住む	伊東忠太『建築巨人 伊東忠太』読売新聞社	【伊東忠太が晩年、自ら筆をとった自叙画伝。出生から、上京、父の転勤で移り住んだ千葉県佐倉までの生活が描かれている】33頁 【明治12年には一度佐倉に移転するが、明治14年再び東京に戻り東京外国語学校独逸語科に入学した】60頁
明治・大正	香取正彦	金工家香取秀真の子・正彦も金工家*昭和時代から現代に再掲	『香取秀真全歌集』中央公論社	【(*大正十四年)十一月九日長男正彦掛川の寺田氏より嫁をとる。十九日佐倉へ行くと二人をやる。佐倉なる彼の養祖母は既に逝きたまひ、祖父は長く病牀に在り、今日はいかばかりよるこびたまふらむと思ひやるだに涙ながれたり 嫁とりしこれもこの父もむつきより養ひけりとなきたまふらむ】202頁
明治・大正	岩淵竜太郎	帝国大学の通訳者	山下英一訳『明治日本体験記』東洋文庫430 平凡社	【そこで越前役人は帝国大学の通訳者団から人選をして、結局岩淵(竜太郎)になった。ありがたいことに岩淵がそれを引き受けてくれた。会って見ると、額の広く高い、髪を外国式に長く刈り、黒い目が鋭くよく動き、顔を赤く染める二十歳ぐらいの男であった。二級武士の浪人で、教育も充分受けていた。父は下総佐倉の書道の先生で、岩淵も美しい字を書いた。刀は一本しか差していなかった】94頁 *福井藩のお雇教師として来日したアメリカ人グリフィスの体験記。岩淵は彼の通訳となる。
明治・大正	芝本久兵衛	「三峰山道中記」著者	森林太郎(鷗外)「伊澤蘭軒」『鷗外全集』第十七巻 岩波書店	その三百六十八【二十一年警が下総佐倉に徙った。東京今川小路の家より佐倉新町芝本久兵衛方に徙ったのである。是は佐倉にある陸軍将校に仏語を授けむがためであった】780頁 【二十三年警が佐倉の寓を撤して赤羽に舍った】780頁
明治・大正	東山千栄子	旧佐倉藩士の娘	森まゆみ『明治快女伝』労働旬報社	【本名河野せん。一八九〇(明治二十三年)年、下総佐倉藩の家老を勤めた家柄に生まれた】313頁
明治・大正	高田元三郎	明治二十七年一月一日生れ。昭和四五年、佐倉市の名誉市民第一号となる。墓は市内の教安寺	高田元三郎『記者の手帖から』時事通信社	【私が新聞記者になった直接の動機が、夏目漱石先生の示唆にもとづいたのだとしたら、夏目先生を知るようになったのが、一高入学へ入ったからであるから、一高入学を勧めて、無試験入学を取り計らってくれた山内佐太郎先生が、新聞記者になった最初の機縁を作ってくれた人だということができる。その意味でも、山内先生は私にとって忘れることのできぬ人である。私は東京で生れたが、六歳の頃母の郷里である千葉県佐倉に移り住み、そこで小学校と中学校をすませた。少年時代を十余年過ごしたのだから、佐倉は私の故郷である】323頁 *大正六年、毎日新聞社に入社
明治・大正	歩兵第二連隊		橋本昌樹『田原坂』中央公論社	【第二連隊の二箇大隊及び警視隊七百名は、今朝四時長崎を発した。明十九日、熊本の南方肥後八代附近に上陸の手筈である】155頁 【まさに出発しようとした時、次の伝令が到着した。第二連隊の鏡町口方面苦戦、死傷頗る多しというのである】159頁

明治・大正	歩兵第二連隊		網淵謙錠『苔(たい)』中央公論社	【思案橋一という、最近では坂本龍馬その他幕末の志士を主人公とした小説や、「思案橋ブルース」といった歌謡曲などで、長崎丸山の思案橋が一般に知られるようになったが、江戸にも同じ名の橋があった】139頁 【この千葉県庁を襲おうという計画はなにに由来するかというと、ちょうどこの頃、海軍砲兵隊が解隊となり、その隊にいた会津出身者が永岡を頼って来たので、中根米七の世話で、この九月三日に千葉県警察に紹介し、警部五名、巡查二十二名が採用されていたので、その内応を当てにしたものようである。そのうえ千葉県警察署長の加藤寛六郎は旧会津藩士であった。また佐倉鎮台兵を説くというのは、千葉に騒擾があれば佐倉兵營が出動するので、それを目標としたわけで、佐倉連隊の大隊長、陸軍少佐永田秀蔵は松本正直と親交があり、その永田大隊長を介して、前原一誠と縁故のある阿武連隊長を説き容れる策が進んでいたともいわれる】159頁
明治・大正	歩兵第二連隊		司馬遼太郎『翔ぶが如く』五 文藝春秋	【永岡は、隣県の千葉県に目をつけた。千葉県庁を襲って軍資金をうばい、千葉県佐倉に駐屯する鎮台兵の人心を収攬してこれをひきいようとした】68頁 【佐倉の鎮台兵はどうするか、については、同志のひとりの松本正直(鳥取士族)が、一わしは、佐倉の大隊長を知っている。ということで、計画が成立している。松本正直はかつて陸軍大尉で、西郷の下野後、ほどなくやめた。松本の陸軍時代、いま佐倉に大隊長として勤務している陸軍少佐永田秀蔵と懇意であった。だから永田を説得すればその兵力をごっそり当方にもらえるだろうというのが、計画というより希望だった】68頁
明治・大正	歩兵第二連隊		杉本章子『残映』文藝春秋	【この夜一保之たち不平士族の仲間十三名は、通運会社出張所と名を改めた小網町一丁目にある思案橋たもとの船宿で、下総登戸行きを船を雇い、千葉へ赴こうとしていた。熊本、秋月、萩の拳兵に呼応すべく、千葉県庁を襲い、佐倉連隊の兵士を説得して北を目ざし、会津の鶴ヶ城に抱って兵を挙げる企てだったのである】127頁
明治・大正	歩兵第二連隊		児島襄『日露戦争』第三巻 文藝春秋	【第一師団長松村務本中将は「松樹山攻撃隊」・第二連隊の突撃隊(第一大隊)が退却したあと、午後三時五十七分、第二連隊長渡辺祺十郎大佐に突撃再開を命じた。大佐が、午後五時三十分を期して第三大隊を突撃させる旨を復命すると、中将は、午後四時三十分、必ず同時に突撃せよ、と念をおして、指示した。「全滅ヲ賭シテ、一挙(松樹山)堡塁内ニ突入セヨ」235頁 【「二〇三高地ノ斜面ハ、麓カラ頂上マデ真黒ニ我が忠勇ナル将兵ノ屍ニテ蔽ハレ、実ニ惨憺タル光景ナリキ」281頁 【突撃隊長・第二連隊第一大隊長馬場少佐は突進を号令した】346頁【第二連隊主力も松樹山堡塁に進出して「残敵ノ所在」の確認作業をつづけるうちに、崩壊した兵舎から白旗がふられるのを発見した】347頁
明治・大正	歩兵第二連隊		生出寿『知将児玉源太郎』光人社	【新連隊長児玉源太郎中佐の歓迎会が、着任直後、部下将校たちによって、千葉県佐倉の料理屋でひらかれた】113頁 【千葉県習志野の演習場で、乃木希典大佐(進級)が指揮する歩兵第一連隊(東京)と、児玉中佐が指揮する第二連隊が対抗演習をやった。統監は参謀本部長の山形有朋中将である】114頁【馬にのってすすんでいた児玉は、首すじの蚊をたたきながら「乃木はいくさがヘタだ」と笑った】114頁 【芸者遊興がすぎて、児玉は佐倉の料亭米新楼に、六百円の借金をつくった。少尉の月給が二十円ほどである。現代ならば三百円以上であろう】116頁 【道楽亭主のために、児玉の妻マツは、子ども四人をかかえ、家計のヤリクリに四苦八苦した。後年マツは、佐倉生活について、「そのころのわたしどもは、貧しい頂上でございました。出るにも、入るにも、一葉の帯一筋のご」117頁
明治・大正	歩兵第二連隊		古川薫『天辺の椅子』文春文庫	【(*明治十三年)四月三十日、(*児玉)源太郎は中佐に昇進、東京鎮台歩兵第二連隊長兼佐倉當所司令官を命じられた】174頁【明治十四年の春、第一連隊に對抗演習を申し入れた。東京第一連隊長は乃木希典である】175頁
明治・大正	歩兵第二連隊		三戸岡道夫『児玉源太郎』学研文庫	【西南戦争が終結して三年、明治十三年に児玉源太郎は二十九歳で陸軍中佐となり、千葉県は佐倉にある東京鎮台第二連隊の連隊長となった。同じ頃、乃木希典は東京の歩兵第一連隊の連隊長として、大佐に昇格していた。例の「軍旗喪失」で何の処罰も受けなかった乃木希典が大佐となり、上部組織にいてその責任を負った児玉源太郎が中佐というのは、外から見ると不公平であると言える。が、それなりの事情があった。乃木は山県有朋にいい直結する長州閥の一人で、しかも山県有朋が師と仰ぐ吉田松陰の縁戚にあたる。自派の人間を増やしたいと目論む山県有朋としては、乃木は大切な駒である】141頁
明治・大正	歩兵第二連隊		中村晃『児玉源太郎』PHP文庫	【この佐倉での連隊長時代、源太郎は花街で大いに遊んだ。連隊長とは言いながら年齢はまだ三十前で、それが面白くないはずがなかった。一人で行くことはほとんどなく、大勢で馬鹿騒ぎをするのを好んだ】136頁
明治・大正	佐倉炭		夏目漱石『虞美人草』新潮文庫(明治四〇年、朝日新聞に連載)	【佐倉炭の白き残骸】116頁
明治・大正	佐倉炭		夏目漱石『文鳥』『現代日本文学大系17夏目漱石集』一 所収 筑摩書房(明治四一年、大阪朝日新聞に連載)	【今朝理けた佐倉炭は白くなって】316頁
明治・大正	佐倉炭		夏目漱石『彼岸過迄』新潮文庫(大正元年、朝日新聞に連載)	【佐倉を埋けた火鉢を勧めて】61頁
明治・大正	佐倉炭		夏目漱石『行人』『現代日本文学大系18夏目漱石集』一 所収 筑摩書房(大正元年、朝日新聞に連載)	【新しく活けた佐倉炭】215頁
明治・大正	佐倉炭		森鷗外『追儺』『現代日本文学大系7森鷗外集』一 所収 筑摩書房	【頭の方を火鉢の佐倉に押付けて燃やす】196頁
明治・大正	佐倉炭		国木田独歩『竹の木戸』『牛肉と馬鈴薯・酒中日記』所収 新潮文庫(明治四一年、中央公論社から刊行)	【一表八十五銭の佐倉があれだよ】256頁 【佐倉が四個そっくり無くなっている】265頁 【土籠炭を袂に入れ佐倉炭を前掛に包んで】268頁 【「何炭を盗られたの」とお徳は執着お源を見ながら聞いた。「上等の佐倉炭です」】274頁

昭和・平成		昭和・平成時代を舞台として描いた作品	
佐倉という文字が出てくる作品			
昭和・平成	佐倉	吉川英治『忘れ残りの記』 雪華社	【母の郷里は、千葉県佐倉で、古くは堀田相模守の領である。生家は代々その堀田藩士であった。ぼくらの童心の印象に深い「おじいさん」つまり母の父は、山上弁三郎といった。戦争中であつたが、千葉刑務所長で名物男の根田兼治氏に誘われて母の生家のあつた印旛沼の上に佇み、小学校で講演したり、縁家の佐藤氏の案内で、菩提寺へ詣つたりして、一日を過ごしたことがある】28頁【重要無形文化財に指定された人形作家の堀柳女さんの実家と、私の母方の生家とは、同じ佐倉藩であるばかりでなく親戚関係でもあつたという】80頁
昭和・平成	佐倉	木村礎『戦前・戦後を歩く』 日本経済評論社	【千葉県佐倉市に、かつてそこを領していた譜代大名堀田氏の藩政文書があることを知り、これを研究したいと思つたのである】267頁 【佐倉での合宿は、日産厚生園という大きな病院の敷地内にある堀田氏の旧屋敷だつた。これは明治になってからの建物で立派なものである。その中の大広間ともう一つの部屋(女子学生用)及び台所と食堂等を借りた。まことに豪勢なことだつた。佐倉は、かつてのれっきとした城下町であり、銭湯があつた。仕事を終えて思い思いに銭湯に行く。これは一日中で最もものんびりする時間であつた。中には手拭を肩に引っかけ鼻歌まじりで行く連中もいる。当時はベギー葉山の「南国土佐をあとにして・・・」がはやっていた。後年懐かしのメロディーでこれを聞くと、佐倉のことを思い出したものである】268頁
昭和・平成	佐倉	宮部みゆき『龍は眠る』 新潮文庫	【我々が初めて出会つたのは、九月二十三日の夜十時半ごろのことだつた。佐倉工業団地の近くで、路肩に自転車倒し、彼はしゃがみこんでいた】10頁【「東関東自動車道」へ向かつてるんだよ。方向さえ間違つていなければね】佐倉街道へ出て南に走れば、インターチェンジはそれほど遠くないはずだつた】16頁
昭和・平成	佐倉	高橋治『花と心に囲まれて』 講談社	【人の幼児体験をどこまで遡ることが出来るのかというのは、しばしば話題になる興味尽きない問題である。私にとって、最も古い記憶は、総武線の佐倉駅前にあつた鉄道官舎と不即不離なものとなつている。いいかえれば、私の人生は鉄道官舎から始まつている。一九三三年十一月、私の父は佐倉機関区の助役に任命された】11頁 【その夜、父はとうとう帰らなかつた。あとでわかつたことでは、その朝、東京の中央部で起つた反乱事件の鎮圧部隊を送り出すために、父は生涯で最も多忙な一日を送つていた。息子の誕生日どころではなかつたのだ。この二・二六事件鎮圧部隊突貫輸送に際して、現場指揮をとつた佐倉機関区助役の仕事で、千葉の運輸事務所から注目していたのが、後に国鉄総裁になる下山定則氏だつた】13頁
昭和・平成	佐倉	吉村昭『仮釈放』 新潮文庫	【故郷は佐倉だつたね。なにをするために行くんだね】116頁 【川に突きあたつた。それは、小さい釣竿をのべてたなごを釣つた高崎川で、かれは当時と変わらぬ土手の上を暗い川面に眼をむけて歩き】125頁 【かれは、道を引返し、武家屋敷の塀がつづく路地に入った】126頁
昭和・平成	佐倉	左右田謙『殺人ごっこ』 春陽文庫	【Sは起伏の多い町だ。ちよつと町をぶらついても、一つ二つは必ず坂にぶつかる。駅前から続いたら坂を上りながら、彼は最初にこの町を訪れた日のことを思い出していた】16頁 【このSの繁華街は、ちよつと馬の背のように狭い、細長い丘陵の上にあつて、学校はそれを越した山ふところの窪地にある】18頁
昭和・平成	佐倉	椎名誠『ハーケンと夏みかん』 集英社文庫	【佐倉藩につながるナントカという名刀】170頁
昭和・平成	佐倉	椎名誠『赤目評論』 文春文庫	【京成電車で佐倉まで日帰り出張ということになると京成通勤急行一行商のおばさんーなんきんまめ」というそちら方面の公式が明確に描かれ】49頁
昭和・平成	佐倉	椎名誠『フィルム旅芸人の記録』 集英社文庫	【クルマで佐倉へ】78頁
昭和・平成	佐倉	庄野潤三『葦切り』 新潮社	【毎日、私と同じ成田線で佐倉まで通つている】
昭和・平成	佐倉	高村薫『レディ・ジョーカー』 毎日新聞社	【千葉の佐倉市へ、カルト教団信者の実家へ取材に出かけていた記者だつた】271頁
昭和・平成	佐倉	大沢在昌『新宿鮫』 光文社	【千葉県の佐倉だつていつてたわ。佐倉のどこかは知らないけど】194頁
昭和・平成	佐倉	京極夏彦『絡新婦の理』 講談社	【伊佐間です。伊賀の伊、佐倉の佐、土間の間】167頁
昭和・平成	佐倉	宮部みゆき『蒲生邸事件』 光文社	【蒲生大將は、明治九年千葉県佐倉市の農家の次男として生まれました】9頁
昭和・平成	佐倉	江國香織『神様のボート』 新潮社	【佐倉はおもしろい町だ。あかるくてのんびりしている。町じゅういたるところに彫刻があり、しずかで、ふるい商店街もある】75頁 【ここは日ざしの美しい町だ。複雑な感じのしない町。いい町だ】78頁 【佐倉の町にはおもしろいものがあります。風車です。変でしょう？でも大きくて立派な風車です。印旛沼の近くにあるの。沼のまわりはサイクリングができるから、今度遊びにきてね】84頁
昭和・平成	佐倉	遠藤武彦『皇帝のびっくり箱』 文芸社	【佐倉市鹿嶋橋交差点】242頁 【あの二人、長嶋監督の後輩かも知れん】243頁
昭和・平成	佐倉	谷部金次郎『昭和天皇と鰻茶漬』 河出書房新社	【佐倉市に家を買つてまだ五年】195頁
昭和・平成	佐倉	旭爪あかね『稲の旋律』 新日本出版社	【佐倉の駅の周辺で、また景色は都会風になりました】22頁 【線路の両側が水田でした。その向こうに、濃い緑色をした森が見えました。田んぼの稲はびっしりと整った列をつくり、その表層に、葉先と並んで、無数の黄緑色の穂が上を向いて立っていました】23頁 【車窓一面が、稲、稲、稲。緑の葉先が太陽の光を浴びて明るく光り、風を受けてさざめくと、茂つた葉の奥の暗い影もゆうり揺らめきます。夏の日光の真下にあるので、田んぼの稲はとでも涼しそうに見えました】23頁

昭和・平成	佐倉		笠野頼子『宇田川桃色邸宅』『渋谷色浅川』所収 新潮社	【最後の渋谷だからハチ公というものをもう一度ちゃんと見てみたい、なにしろ、これからは東京遠くなるから】一七月の九日に千葉に引っ越す。「わたしども」って言わずに「うちども」って言う人々にそこで何度か会った。新居はコンビニ徒歩五分超の千葉県郊外。建築業界は冷えているはずなのに、どこに行ってもグリーンセンターとホームセンターが目立つ。「車さえあれば便利なところです」。そこから大手町は一時間と少しで、高田馬場だったら一時間半。「なーんだ通勤圏だよ」、という声も多いが実は乗り継ぎの待ち時間を知ってて勘定していない。つまり乗り換えしないうすむよう、タクシー三千円で勝田台という直通的の駅まで出る事に決めていたから】151頁【結局買える場所に家を買ってそれまで一度も行った事なかった佐倉市というところに生涯住む予定となった】162頁【一度のお家は成田の向こうでしたか。一いいえ手前、佐倉の民俗博物館よりもっと手前】178頁【その二カ月後千葉の一軒家のテレビでふうんVJってもんが流行っているのか、と佐倉の百円ショップで買った沖繩ちゃんすこうと沖繩ビーナツ黒糖を交互に齧りながら少しは退行の治った私は「勉強」していた】185頁【テレビ越しの渋谷は凄く渋谷らしい。なんと言ってもテレビで渋谷って出てれば今は見るようになっている。駅前の佐倉音楽ホールにこのVJを出前するってのはどうでしょうか、なんか考えていて、ふと思いついた】186頁
昭和・平成	佐倉		笠野頼子『愛別外猫雜記』河出書房新社	【そして、長嶋茂雄の出身地だという、今までは何の縁もゆかりもなかった千葉県のS倉市というところに移り住んだ。つまり一家を買ったのだ。四匹の猫を無事に生かしておくために、ドーラにとって良い環境を確保するために】6頁
昭和・平成	佐倉		笠野頼子『幽界森娘異聞』講談社	【S倉って言うその耳慣れない名前の引越し先は、ナリタから数駅。駅前はまだか緑の中に新しい広い家ばかりでぱっと見外国風。スチュワードとかパイロットとかモンキー・パンチとかナガシマの親とかが住んでいたりする。ま、空の港街だな】141頁
昭和・平成	佐倉		笠野頼子『S倉迷妄通信』集英社	【私がいるのはS倉市という北房総の内陸、東京の雑司が谷の真東に当る。東京を転々として十五年目、ここに辿り着いた】15頁【新居周辺には親戚はいないが、知り合いの評論家と先輩作家がふたり。車で十分程のところには室井光広夫婦。すぐ近くだがもう少し交通の便のいい別の駅利用で、付き合いの長い出版社に通っている編集者数名。知ってからは妙にこのあたりも文士が増えるのではと想像したりした。『田端の文士村だって土地が安かったから出来たんじゃないの』と森類の小説にあった何行かをうろ覚えで私は目茶苦茶いい、「こうなったらもうここは千葉の文士村だ・文士は全員このあたりに強制入植させる・今後」と騒いではみた、住んでみるまではそんな事知りもしなかった】49頁【S倉に引っ越してから一年が経った】90頁【どうやら「だっぺ文化圏」らしいと最近気付いた】104頁【中国風水の本だとS倉は「双竜遊戯形」という特殊な地形で、と言ったって尾張小牧なんかもそうなのだから別に日本でただひとつというわけではないが、起伏の多い小さい丘が巴状に向かい合って雌雄の竜が遊んでる感じ、なのだという事である】107頁【雑司が谷の方がS倉よりずーっと北関東、と言いたくなる。そういうわけで、S倉の人気はいい、という事に今のところはしておく。先のことは絶対判らないが】116頁【草のアトピーと土のアトピーはS倉のいい水のせいかな少しは治まっている】145頁【S倉に越してから一年半経った。「越してから」というよりももう「暮らしている」と言ったほうがいいだろうか】164頁
昭和・平成	佐倉		宮部みゆき『模倣犯』上 小学館	【工場は佐倉と川崎にあって】167頁
昭和・平成	佐倉		清水候鳥『利根川図志吟行』『奥の細道文学賞作品集』所収 草加文庫8	【京成佐倉駅前にはふた筋の長い坂があり、上がり切ると新町の商店街である。駅前の広場から、私は左手の静かな方の道を選んだ】30頁【この坂には辛い思い出がある。太平洋戦争の時、東京の下町の小学生であった私は、母に連れられてこの坂を上り、郷家へ食糧を買いに行った】31頁【母が気まずい思いをして手にいれた重い薩摩芋や米を背負い、この坂を下りて行くと、途中で京成の駅のプラットホームが見える。母は取り締まりの巡査が出ていないかを頻りに心配していた】31頁【母よ、おりに父と連れ立ち、竹林と椿の多い佐倉に帰り、遊びて安かれ】34頁
昭和・平成	佐倉		大木勲『やまもも通り』	【朝夕の勤めの往復、京成臼井駅北口を出入する。駅前通りはヤマモモの並木が続いている。植栽された当時は何となくひ弱で、うまく育てられればいいがと思いつつ通り過ぎたものだったが、今ではすっかり逞しくなっている】27頁
昭和・平成	佐倉		高見澤幸子『平和への体験的提言』文芸社	【昭和十九年から二十年当時、山口高女に在籍し、女子動員学徒として従事した山口県在住の同級生はこの作品の取材に全面的に協力しました。佐倉市に住む私は、小学館の『私の昭和史』に応募し】58頁
印旛沼という文字が出てくる作品				
昭和・平成	印旛沼		吉植庄亮『歌集開墾』短歌新聞社	【開墾二年（※昭和二年）はりつめし沼の氷のいく目とけず鶏とほくその上にあそぶ印旛大沼凍りつくしてあさゆふに見つる鴨鳥を見ざるこの頃】36頁【開墾八年（※昭和八年）印旛沼の大沼底ひをあらはして梅雨日でり年のたぐひまれなる印旛沼の大沼かちわたり魚くづを人ぞあされるつゆひでり年をさなきゆかつて見ざりし印旛沼のそこひそひろき空の下びに】109頁
昭和・平成	印旛沼		泉鏡花『貝の穴に河童の居る事』『鏡花全集』第二十三巻 所収 岩波書店	【昭和六年発表】【『ほ、ほ、印旛沼、手賀沼の一族のそろうよな、様子を見ればの』】531頁※いつの時代に入れたら良いのかわかりません。

昭和・平成	印旛沼		水野葉舟「古旧『沼の思ひ出』所収 葉舟会(昭和八年発表)	【近頃『沼』が頻りと私の心を誘い立てる。私がこの頃、親しみを深くしている。そして、その純情を愛している青年の人たちが偶然に沼の向こうに多くなって来た。その人たちと逢うたびに、沼が私の心に近々と鮮やかに映る】110頁 【あの静かな水が、心を誘う。沼の水草と、水に浮かんでいる鳥と水にうつっている丘の林と・・・こちらの岸から渡しを渡った先の茂みの中に籠りかかれた生活と、美しい自然とにきりと誘い立てられる。昔、自分の心に思いも及ばなかった事の一つは、私自身がこの下総の住人になって、多分地上の生活を終るようになるだろうという事であった】110頁
昭和・平成	印旛沼		水野葉舟「若作の家『沼の思ひ出』所収 葉舟会(昭和一〇年発表)	【沼の中に見えるものを指さした。柔かいあつぼった緑の草の広い茂みが水の中に見えるのに驚いたのであった。それはこの濁った水の中で実に鮮やかだ。「真菰です」と一人が教えてくれた。「実に美しい」と私は感嘆する】132頁
昭和・平成	印旛沼		永井荷風「断腸亭日乗」『荷風全集』第二五巻 岩波書店	【(*昭和二十三年二月十七日)午後京成電車にて成田に至る。臼井佐倉を過る時水田の彼方に印旛沼を望む】543頁
昭和・平成	印旛沼		酒詰仲男『貝塚に学ぶ』学生社	【八幡一郎、甲野勇、和島誠一が発掘をやっている間に、私は舟で印旛沼をわたって、その向かい側の台地を歩きまわり、またある日は臼井の背後の台地を歩いた。「印旛沼に關係のある水系全部の遺跡を調べてみたまえ」というのが、長谷部先生からもらった命令であった。印旛沼周辺の春はなごやかであった。沼の見える岡を一日歩きまわって、貝塚や、包含地をさがしまわり、ときには古墳や土師の遺跡にもぶつかった。こわかったのは放れた牛に追いかげられたときであった。山の上から見てはいたが、畑へおりていくと、牛がこちらへ向って突進してきたので驚いた。百姓たちは「何だ、あの牛、つかまえてくれればいいのに」など、手を背後にやてのんびりみているが、こちらはそれぞれの騒ぎでなかつた。やっとな、桑畑に逃げこんで難を避けた。同じ日に逃げてきた騎兵のウマを、和島誠一は道の真ん中に大の字になって手をひろげて取りおさえたので、この方は評判がよかつた】72頁
昭和・平成	印旛沼		島尾敏雄『死の棘』新潮社文庫	第十章目を繋げて 【横道から本通りに出て右にいくらか歩かぬうちに海隣寺坂に出るが、そこから城跡は坂下の森に隠れて見え、前方見渡すかぎりのたいらな地勢のなかにまっすぐ延びる一本の白い道をまんなかにして、展開された田圃の風景がながめられた。ここに来るとどうしてか、古い町の蜘蛛の巣のからみつきをようやくのがれてきて広い大空に飛びたつ直前に立たされた気分ひと打ちされるのがへんだ】385頁 【外に出るといつも家のなかには何か待ち構えていそうな思いがふくれてくる。しかしいつまでもそうしているわけにもいかず、岡の鼻をまがって、海隣寺坂につながらる新道の、土をもちあげ土手をきずいてこしらえた傾斜のゆるい長坂をのぼりながら、自然に振り向く目の先に沼の広がりがよみがえってきた。「ほらあそこが印旛沼だ」とこどもらに声をかけたが、もう宵闇にとけ入って、それらしいものも見分けられない】393頁
昭和・平成	印旛沼		島尾敏雄『透明な時の中で』潮出版社	【印旛沼南辺の佐倉の町に住んだ過去がある】67頁 【貸家の近くにあった海隣寺坂は、町にはいる西の入口の坂であった。その坂上からは下総台地一面の平野の展望が目にとめられ、はるか地平のあたりに、浮き上がった恰好で、にぶく光る大地の目さながらに印旛沼西南端の部分が横たわっていた】68頁
昭和・平成	印旛沼		東海林さだお『ジョージ君の満腹カタログ』文春文庫	【田んぼの中を駆け抜け、沼のほとりを走り、スカイライナーは成田空港駅に到着した。「しかし、どうしてこれをスカイライナーと呼ぶんでしょか」田んぼライナーのほうが適切ですな」「あるいは、沼ぶちライナーとか!】106頁
昭和・平成	印旛沼		椎名誠「はじめての川下り」『ロシアにおけるニタリノフの便座について』所収 新潮文庫	【沼の周囲一面に葦が生え繁っており、水面のすぐ下あたりまで水藻や水草がのびていて流れのない沼の中でじっと動きをとめていた。それまでぼくは湖と沼の違いというものあまりよくわからず、湖の小さいのが沼というのであろう、など思っていたのだが摩周湖や芦ノ湖などはじめてとして印旛沼よりも小さい湖は沢山あるからどうもそれでは説明がつかないのであった。しかしそのとき水面の下で水草や水藻がじっと動きをとめているのを見て、ああ沼とはこういう表情をしたところをいうのだな、とんだか直感的にわかってしまったのである】67頁 【それからふいに、そうだ!このフネの名前は《第一インパル》というのによしよと思った】93頁
昭和・平成	印旛沼		椎名誠『アメンボ号の冒険』講談社	【この「花見川いかだ下り探検隊」も自然にオボが隊長ということになった。どこから下りは始めるか、ということが重要な問題で、花見川の出発点は印旛沼だからそこからは始めるのが一番いいのだけれど、印旛沼までは遠くて、自転車でも半日くらいかかりそうだった。それからまたもっと重要な問題は、印旛沼から花見川が流れている場所を四人の探検隊の誰ひとりとして実際に見ていないことだった】113頁
昭和・平成	印旛沼		椎名誠「再びむらむらと」『モンパの木の下で』所収 文春文庫	【現在は水を求めて印旛沼の近くに移ったが四百坪の土地に二千匹以上のナマズを飼っている】102頁椎名誠「我々は雪の夷隅川をいかにして心やさしく下っていったか」
昭和・平成	印旛沼		椎名誠「我々は雪の夷隅川をいかに心やさしく下っていったか」『イスタンブールでなまず釣り』所収	【千葉の印旛沼からでている三級河川花見川を二日がかりで下っただけである】202頁
昭和・平成	印旛沼		椎名誠「いま中国・シルクロードはどうなっているのか」『地球どこでも不思議旅』所収 集英社文庫	【印旛沼といかんじでもある】224頁

昭和・平成	印旛沼		笠野頼子『S倉迷妄通信』集英社	【二階に三つある部屋のうちの北西の五畳半を風水で決めて書斎にして、 伝播沼 という遠目には輝く湖水とも言える広い沼に小さい窓のカーテンを開け放って、私はワープロを打つ。窓の外の景色はまだぐにやぐにやして、沼もつい最近までは見えていたはずなのだが昨日からふいに見えなくなった。彷徨える湖、ロブ湖、というのが確かあったはずだし、伝播沼だって結構散歩したり長期旅行に出たりしているのかも知れないのだった】53頁 【 沼際の花火 はトイレの窓から見るしかないがこっちに火の粉が飛びそうなのははっきりしている】113頁 【北西の書斎の真北、小さい窓際に椅子を出してその上に立つ。窓枠すれすれ、近所の家の屋根と沼の向こう側の、低い緑の、山の間に一晴れた日には薩摩の瑠璃硝子のように曇った日には巨大な鼠の背のように、 S倉郊外 帝国の汚れという汚れを一身に引き受けた、遠目には清らかな水が溢えられている。一沼が動くはずがない。最初灰色にかすむ水だと思っていたのは道路の一部でその後双眼鏡で確かめて本当の位置が判った。 「真っ青な沼 が見えてホトギスの聞こえる」と自分は平然とその実態を黙殺して、この生活を美化したエッセイを書き新刊の宣伝をする】103頁
佐倉ゆかりの人が出てくる作品				
昭和・平成	飯沼金太郎	さくら大正時代のパイロット・昭和八年、亜細亜航空飛行学校を設立する	小暮達夫「ひとすじの飛行機雲ー飯沼金太郎の生涯」『さくらおぐるま』第32号 所収	【大正九年四月二十一日、東京にある洲崎埋立地から二機の複葉機が大坂へ向けて飛び立った。この日、帝国飛行協会主催の東京大阪間周回無着陸飛行大会が開催されており、新記録樹立の瞬間を見ようと会場には数万の観客が詰めかけていた】141頁 【大会当日までは小栗飛行学校の小栗常太郎、伊藤飛行機研究所の山縣豊太郎、帝国飛行協会所属の 飯沼金太郎 のいわゆる「民間飛行界の三太郎」による争奪戦として注目を集めていたが、小栗が試運転中に車輪を破損してしまったため急遽棄権、大会当日は山縣と 飯沼 の一騎打ちとなった】141頁
昭和・平成	飯沼金太郎	大正時代のパイロット・昭和八年、亜細亜航空飛行学校を設立する	岡田宙太『房総ヒコキ物語』斎書房	【帝国飛行学校が看板を掲げた同様に、東京・洲崎の埋め立て地に「亜細亜(アジア)航空飛行学校」が設立されて話題を呼んだ。校長の 飯沼金太郎 (昭和三十九年、六十七歳で死去)は、印旛郡佐倉町(現、佐倉市)の出身】157頁 【亜細亜航空学校の設立後、さらに 印旛沼に水上飛行学校 を設立しようとしたが、こちらの方は果たせなかった】157頁
昭和・平成	飯沼金太郎	大正時代のパイロット・昭和八年、亜細亜航空飛行学校を設立する	平木國夫『飛行家をめざした女性たち』新人物往来社	【そんな(*馬淵)テブ子が初めて飛行機に同乗したのは、それから十一年以上たって、昭和八年(一九三三)の春になってからである。むろんちよっとした同乗飛行だったけれど、それが病みつきになって、それから間もなくの同年五月二十二日東京・洲崎飛行場(埋め立て地)に開校された亜細亜航空学校に入学した。校長の 飯沼金太郎 (千葉)は、帝国飛行協会陸軍依託第3期練習生出身で佐藤要蔵の後輩である。ある時期、兄事というより師事したことがある。大正九年四月二十一日、東京一大阪間無着陸周回飛行競技に参加したが、霧の中に迷い込み箱根丹沢山に正面衝突、左右両大腿骨上部骨折の重傷を負った。このとき優勝したのは伊藤晋次郎門下の山縣豊太郎である。 飯沼 の姿は航空界から消えたが、十三年後の五月二十二日中島知久平の後ろ盾で亜細亜航空学校が設立され、校長となった】222頁
昭和・平成	梶貝襄治	ガダルカナル島夜間爆撃を指揮した名パイロット	成瀬恭『海鷲の航跡日本海軍航空外史』原書房	【 梶貝少佐 とともに陸攻隊の双璧といわれた七〇五空(四三沢空)飛行長の三原元一少佐の未帰還が起った】384頁
昭和・平成	梶貝襄治	ガダルカナル島夜間爆撃を指揮した名パイロット	秦郁彦『太平洋戦争航空史話上』中公文庫	【それは史上最初の飛行機による夜間雷撃であった】137頁
昭和・平成	梶貝襄治	ガダルカナル島夜間爆撃を指揮した名パイロット	香取秀真『香取秀真全歌集』中央公論社	【 梶貝襄治少佐 君レンネル嶋沖海戦に抜群の戦功をたてて名誉の戦死をどけたるに二階級特進大佐に任ぜられたるを伝えきて 南の海うしほ花さくレンネルの沖にみつきて國まもらすも 】16頁
昭和・平成	梶貝襄治	ガダルカナル島夜間爆撃を指揮した名パイロット	高松宮宣仁親王『高松宮日記』第五巻 中央公論社	【(*昭和十八年)一月二十九日(金)晴。午後、参本ト「キスカ」「アッツ」ニ関シ話合。伊一潜「カミンボ」ニテ交戦沈没。「ガ」島南方、陸攻雷撃戦(701、705空)(自爆未返3機)(梶貝少佐戦死)】513頁
昭和・平成	石渡正義	神風特別攻撃隊神雷部隊員	室原知末「沖繩神雷特攻」『天翔ける若鷲』所収 読売新聞社	【私たちの目の前で、「一人一艦刺し違え」の壮烈な散華とげられた海軍上等飛行兵曹、 石渡正義 氏は、当時、二十一歳、独身、千葉県印旛郡和田村高崎の出身である。彼の勲功は永遠に顕彰され、連合艦隊全軍に布告されて二階級特進となり、海軍少尉に任ぜられ、靖国の神と祀られた。神風特別攻撃隊神雷部隊、桜花隊所属、菊水五号作戦参加。戦果、戦艦もしくは大型艦を轟沈す】66頁
昭和・平成	石渡正義	神風特別攻撃隊神雷部隊員	内藤初穂『極限の特攻機桜花』中央公論社	【五月四日、晴。「 菊水五号作戦 」発動。沖繩南部の丘陵地帯に追いつめられた第三二軍が一か八かの総攻撃を試みたのに呼応して、泊地艦船に海軍特攻機約一〇〇機、陸軍特攻機約五〇機。神雷部隊から第七次桜花攻撃隊七機(未帰還五機)、二番番爆撃「第五神剣隊」二〇機(未帰還一五機)。この日、アメリカ側は桜花二機の突入を確認した】225頁
昭和・平成	東山千栄子	旧佐倉藩士の子	森まゆみ『明治快女伝』旬報社	【本名 河野せん 。一八九〇年(明治二十三年)、下総佐倉藩の家老を勤めた家柄に生れた】313頁

昭和・平成	島尾敏雄	小説家・一時期、佐倉に住む	島尾敏雄『死の棘』新潮社文庫	第十章目を繋げて 【引越してきた佐倉の町の家は建て物も庭も広過ぎた【広い平野のなかに気まぐれにできた地の皺、その馬の背のようにうねりもあがった岡の上に展開した佐倉は、もともと小さな藩の城下町のおもかげをどことなく残していた】374頁【私たちの移った家は、海隣寺坂をのぼりきってすぐのところ、寺の山門の見える味噌屋のかどから横道にそれた突きあたりにあった。家の横の深い竹やぶは崖に沿った傾斜を持ち、見通しはつかないが、その先は岡のふもとと稲田につづいているはずだ】375頁【浅い谷間道がすぐ終わると、岡のひだのなかから放たれて、広い平野のはしに立たされていることがわかる。抜け出てきた佐倉の町のたたずまいが、岡の上になお残っていることが納得できない思いだ。たぶん鳥の目で宙空から一目のうちに見るのでなければ、この関東平野のなかの堆土の上に来てきた町のかたちをのみこむことはできないにちがいない。中心部ににぎわい、坂や、谷間の竹やぶなど、町の部分部分がそれぞればらばらに印象され、通り過ぎるときだけあざやかな印象を受けそのあと先は忘れ、ばらばらのまま記憶のひだに吸い込まれてしまう】392頁
昭和・平成	島尾敏雄	小説家・一時期、佐倉に住む	高比良直美『椿咲く丘の町』	【市役所は海隣寺町にある。近くに味噌屋もある。『死の棘』に出て来る味噌屋だ。島尾敏雄が借りて住んだ家がこの辺りにあるかも知れないと思い、私は明るい陽気に誘われて散歩がてら『死の棘』の家を探してみることにした。私は小説の文章を思い起こしながら歩いて行った】34頁【私が『死の棘』に出会ってから半年がたとうとしている。このごろ佐倉の町を歩くときとソオとミホの気配をふっと感じることがある。風景を眺める自分の視線に島尾敏雄の視線を重ねて感じることもある。明るく大きく姿を変え特徴をそぎ落としてゆく佐倉の町】82頁
昭和・平成	島尾敏雄	小説家・一時期、佐倉に住む	高比良直美『さくら日記』	【三月三十一日。夕方、海隣寺町にある佐倉市役所の駐車場で車を止めて、かつて島尾夫婦が貸家して住んだ近辺を歩いた。今年には二〇〇〇年。あれから四十六度目の春だ。毎年桜の開花便りの開かれるこのころになると、島尾は佐倉に住んだ二十七日間が巡ってきたことを意識する。けれど、日々の重なる島尾の佐倉での足跡をたどってみようと思いついたのは久しぶりのことだ】8頁
昭和・平成	今村恒美	佐倉生まれの挿絵画家	井口勢津子『佐倉の泣きん子』丘書房	【佐倉は城下町なので子供達は粗末な木綿でもみなきちんと袴をはいていく】6頁 *今村恒美は、横溝正史の「人形佐七捕物帳」を描き、挿絵の第一人者となる。昭和二六年から「上野鈴本」のプログラム表紙絵を描く
昭和・平成	香取正彦	金工家香取秀真の子・正彦も金工家*明治・大正時代に再掲	綿貫益弘『沢ガニと山桜の記』	【香取(正彦)さんは千葉の佐倉の出の人で、ぼくの実家とは伊藤沼畔の隣町ということもあって、時々お邪魔に参じた。もともと父・秀真譲りの鍔金家で、鐘や仏像具の他にも青銅、金銅、臘銀の壺、花瓶、香炉など、重厚典雅な作を数多く残している。梵鐘を作り始めたのは昭和二十四年、戦時中の供出(軍艦や鉄砲にするために金モノを上納したので)である、どのお寺も鐘や仏具がなく、東京・築地の本願寺に仏教用具復元会というのが出来、その依頼を受けたのが初めだった】193頁
昭和・平成	長嶋茂雄	東京読売巨人軍終身名譽監督 *中世・戦国に再掲	つかこうへい「長島茂雄殺人事件」『つかこうへい傑作選』五、メディアファクトリー	【「正式には蒙古蕨なんです、日本ではなぜか利根川流域の元佐倉のチョーサン沼にだけ繁茂し、'もこも'と呼ばれているんです】306頁【「元佐倉ってのはおかしな町でしてね、僕も千葉の銚子出身なんですけど、小さい頃利根川流域の元佐倉について変な噂を聞いたことがあります」【教えてくれたまえ】「よそ者をけって入れない町でしてね。とにかく年がら年中お祭りみたいな町なんです。長島さんの『もえたね』ってのは町の人の口ぐせでしてね。メンを食っちゃ『もえたね』、煙草買っちゃ『もえたね』と言うらしいです】307頁【佐倉駅からほど近いホテルに着き、窓の外を見ると、すぐそばにオレンジ色の巨大な長嶋茂雄記念球場が見えた】375頁【絶壁のような崖を何度もまわり、佐倉署からトカーで二時間も行ったところに元佐倉の村はあった】376頁【村人たちは全員、ジャイアンツの野球帽をかぶり、チャンチャンコを着てパッチをはき、スパイクをはいていた】377頁【「長島のシグは元佐倉の宝ずら。おめえらの天皇陛下より偉いっぺ。もし、おどしめるような奴がいたら、どんなことでもするがな】382頁【「とにかく、おめえたちを人質にして佐倉に乗り込むんじや】386頁
昭和・平成	長嶋茂雄	東京読売巨人軍終身名譽監督	東海林さだお『駅弁の丸かじり』文春文庫	【長嶋さんに言わせれば】217頁
昭和・平成	長嶋茂雄	東京読売巨人軍終身名譽監督	東海林さだお『ニッポン清貧旅行』文春文庫	【長嶋さんに言わせれば】126頁
昭和・平成	長嶋茂雄	東京読売巨人軍終身名譽監督	東海林さだお『鯛ヤキの丸かじり』文春文庫	【長嶋茂雄が、わが味噌汁は永遠に不滅です】130頁
昭和・平成	長嶋茂雄	東京読売巨人軍終身名譽監督	東海林さだお『ショー君の時代は胃袋だ』文藝春秋	【燃える長嶋】109頁
昭和・平成	長嶋茂雄	東京読売巨人軍終身名譽監督	東海林さだお『ダンゴの丸かじり』文春文庫	【当然、長嶋監督がスイカで、野村監督はカボチャということになる】14頁
昭和・平成	長嶋茂雄	東京読売巨人軍終身名譽監督	赤瀬川原平『老人力のふしぎ』朝日新聞社	【いや長嶋さんの老人力はすばらしいですよ】27頁
昭和・平成	長嶋茂雄	東京読売巨人軍終身名譽監督	田原総一郎『面白い奴ほど仕事人間』青春出版社	【長嶋茂雄さんがすごいのは、自分が好きなことで人よりうまいのは野球だと、見極めたところですよ。面白い人間というのは、だいたい好きな仕事を探して、その仕事をめっちゃめっちゃにやっている人間。そして、それが楽しくてしょうがない、という人たちですよ。ノーベル賞をとった白川英樹さんや高橋尚子さん、】4頁
	長嶋茂雄	*	*この外にも長嶋さんが書かれた本は多くあります。	*
昭和・平成	小出義雄	佐倉アスリートクラブ主催。女子マラソン指導者。高橋尚子などのメダリストを育て	小出義雄『夢を力に！「大化けの方程式」ザ・マスタ』	【昭和四十四年九月一日。私は長生高校から佐倉高校に転任になった】177頁

昭和・平成	小出義雄	佐倉アスリートクラブ主催。女子マラソン指導者。高橋尚子などのメダリストを育てる	小出義雄『小出監督の女性を活かす「人育て術」』二見書房	【私が「走れ、走れ」だけから脱皮して、医学、栄養学にまで足を踏みこんで研究するようになったのは、佐倉高校時代である。それは、ひとつの「事件」がきっかけだった。佐倉高に、たった一人だけの女子長距離選手がいた。この生徒を通して教えられたことは大きい】206頁
昭和・平成	小出義雄	佐倉アスリートクラブ主催。女子マラソン指導者。高橋尚子などのメダリストを育てる	小出義雄『君ならできる』幻冬舎	【そんな生徒のひとは、私と一緒に楽しくマラソンをすることで、自分の夢を見つけた。高校二年生のときに日本歴代三位の記録を出し、その後、推薦で筑波大学に進学し、いまは教員となっている】209頁
昭和・平成	小出義雄	佐倉アスリートクラブ主催。女子マラソン指導者。高橋尚子などのメダリストを育てる	増田明美編・監修『激走！高橋尚子』早稲田出版	【1939年、千葉県佐倉に生まれた小出は、少年時代から異常なほど、駆けっかが好きだったという】101頁
昭和・平成	小出義雄	佐倉アスリートクラブ主催。女子マラソン指導者。高橋尚子などのメダリストを育てる	小出義雄『Qちゃん金メダルをありがとう』扶桑社	【千葉県印旛郡根郷村(現・佐倉市)の小学校時代から足だけに自信があった】125頁
昭和・平成	小出義雄	佐倉アスリートクラブ主催。女子マラソン指導者。高橋尚子などのメダリストを育てる	満茜文博『小出義雄夢に駆ける』小学館	【佐倉高に赴任して9年。教員の道に入って14年近くを費やして小出のひとつの夢は成った。「高校の先生になったら、きっと駅伝の県大会で優勝してみせる」その夢の実現が、小出はたまらなくうれしかった。いまでも言う。「オレの陸上人生の中で、あの優勝は、もしかしたらある意味で、いちばんうれしかった優勝かもしれないね】115頁
昭和・平成	高橋尚子	マラソンランナー・シドニーオリンピック女子マラソン優勝	小出義雄『高橋尚子 金メダルへの絆』日本文藝社	【「私は佐倉で練習します」と、つぶねてくるはずだ】213頁
昭和・平成	高橋尚子	マラソンランナー・シドニーオリンピック女子マラソン優勝	金子ひろみ『食べて、走って、金メダル』マガジンハウス	【シドニーで買い物チームのひとりとして協力してくれたのは、諸岡淳さん。シドニー在住14年の彼は、花屋とウエディングコンサルタントの傍ら、ガイド業も営んでいる。監督の佐倉高校の教え子で、かなり前にチームへの貢献を買って出てくれていたそうだ】175頁
昭和・平成	高橋尚子	マラソンランナー・シドニーオリンピック女子マラソン優勝	早野美智代『高橋尚子』旺文社	【尚子は、1997年の4月から、小出監督や鈴木博美選手とともに、リクルートから積水化学に籍をうつしていた。その合宿所が、千葉県佐倉市にある】104頁
昭和・平成	高橋尚子	マラソンランナー・シドニーオリンピック女子マラソン優勝	高橋尚子『風になった日』幻冬舎	【そのうちの一人は、佐倉の合宿所で三百六十五日、毎日ご飯を作ってくれている渡辺さんである。渡辺さんがリーダー的な存在になって、佐倉に住んでいる地元のおばさんたちと一緒に調理場に立ってくれるのだが、この料理が、いかにもお母さんの味で、素晴らしく美味しい】137頁
昭和・平成	歩兵第五七連隊		今村均『今村均回顧録』芙蓉書房	【千葉県佐倉町屯在の歩兵第五十七連隊の兵員は、悉く千葉県下、房総地方出身の青年であり、入営前の職業はさまざまだが、大部分は、半農半漁を業とした者たちなので、自然、第一師団(東京)に属する四つの歩兵連隊中、その体力は、断然他よりすぐれ、】215頁
昭和・平成	歩兵第五七連隊		今村均『続・今村均回顧録』芙蓉書房	【昭和七年の三月中旬私は、千葉県佐倉町に駐屯している歩兵第五十七連隊長に補職される恵みに浴した】137頁 【いつの頃か、連隊内の犬の好きな将校が歩兵学校(*千葉市にあった)から軍用犬の子を貰ってきたのがだんだん殖え、約十五、六頭が飼育されており、逐次改良されたとかで歩兵学校のものに比しても見劣りはせず、訓練もよく行きとどき、伝令勤務などではよい成績を挙げ、将校以上四名ほどがこれにかかわっていた】139頁 【連隊では、将兵よりの寄稿で毎月小冊子の雑誌を刊行し、兵の読みもの一つにしていた。】139頁 【夏の七、八月は歩兵大隊の練成時である。兵の肉体労働ははげしく、そのうえ暑さに弱らされる。ある日の午前、練習場で訓練を視ていると、前半のものを終えて二十分程の小休憩となり兵は周囲の小松林にはいるなり木によりかかって仮眠した。やっぱり演習がはげしいためだろう?と思いい、後半のはじまるまえ、二、三の兵に質問してみた。「中隊訓練のときと大隊訓練のときは、どちらが演習はきつい?」「はい、中隊訓練のときの方が倍以上きついです」「でも、おまえたちのつかれているようすは今のほうがつよいように見える。暑さのためだろうな」「いいえ、ちがいます。夜分よくねむれないためであります」「うちの兵営は高台に建てており、風はよくとおすだろうが、暑くしくてねむれないのか?」「風ははいります。けれども蚊にせめられます」佐倉という土地は北に印旛沼をひかえて周囲は水田にとりかこまれ、たしかに蚊の名産地ではある。「蚊帳を張ってもかい」「蚊帳はあちこち破れています】142頁 【「従来この兵営に入った若人たちは、日曜ごとに蚊帳を持ち出しては魚すくいをやったものです。それでこんなめになってしまったものでしょう】14
昭和・平成	歩兵第五七連隊		葉治英哉『今村均』PHP研究所	【今村は依然として満州武力解決の時期尚早を憂えたが、自身は昭和七年(一九三二)二月、作戦課長の職を解かれて参謀本部付となり、次いで四月、千葉県佐倉町屯在の歩兵第五十七連隊長に任命された。彼は陸軍中枢の派閥抗争から離れて、若人の練兵に意欲的に取り組んだが、「軍人をやめたい」と家人に洩らすほど、陸軍部内の不当人事に深く失望していた。翌年の八月に陸軍習志野学校幹事、昭和十年三月、少将に進級し、歩兵第四十旅団長に補されて三たび朝鮮に渡り、首都京城の竜山に赴任】57頁

昭和・平成	歩兵第五七連隊		もりたなるお『 銃殺 』講談社	<p>【花島桜子は、(*宮林)直大の恋人である。桜子の父善作は、運送業と煉瓦工場を経営する事業家で、佐倉町の町会議員をつとめている。桜子は来年三月に、佐倉高女を卒業するが、いずれは直大のもとに嫁いでくることが、両親の諒解済みとなっている】112頁</p> <p>【直大の家は、佐倉町鐘木の低地帯にあった。付近には田と畑が多い。近くの高台に、旧佐倉藩主堀田家の邸がある】37頁【第五十七連隊は、佐倉の地名を冠した兵営として、房総地方の壮丁徴募を一手に引き受けるようになった。いまや佐倉第五十七連隊は、房総健児の集う国防の牙城となったのである】44頁【兵営には、約千三百名の下士官、兵が起居し、約八十名の士官(将校)と準士官が勤務していた】46頁【第一師団を満州へ持っていく計画は、軍務局長永田鉄山を中心に練られたものといわれる。第一師団下の連隊、特に在京の歩兵第一連隊と第三連隊には、皇道派の青年将校が多い。これらを、海を越えた遠隔地に追いやるのが、統制派幕僚の狙いとされていた】110頁</p> <p>【昭和維新に参加ということで、わざわざ訪ねてこられたそうですが】115頁【今朝発生せる非常事態警備のために、佐倉第五十七連隊は、師団司令部の命により、二個大隊を出動させる】149頁【天皇の命令による討伐包圍網の、最重要地点は、宮城に接する線であった。そこは、第一師団下の佐倉第五十七連隊と、甲府第四十九連隊ならびに近衛連隊が布陣し攻撃態勢をとっていた】175頁</p>
昭和・平成	歩兵第五七連隊		大岡昇平『 レイテ戦記 』『 大岡昇平全集 』9、10 筑摩書房	<p>【大本営は敵の攻撃方向を、ほぼ正確に推測していた。一応比島方面、台湾南西諸島方面、本土、千島の四方面を想定したが、本土、千島は、すでにサイパンを占拠して、同方面へ攻撃を加える態勢を獲得し、かつ意表に出る敵の作戦傾向に鑑み、念のため付け加えたものである。比島、台湾を最も可能性の高い攻撃正面と判断し、そのいずれに來襲しても、海陸空の戦力を結集して撃滅することとした。これが七月二十四日決定の「捷号作戦」で、比島が捷一号、台湾南西諸島が捷二号である】34頁</p> <p>【十一月一日、方面軍派遣のレイテ島決戦師団の第一陣としてオルモックに上陸したのは第一師団(通称玉)である。師団は歩兵第一聯隊(東京)、第四十九聯隊(甲府)、第五十七聯隊(佐倉)の歩兵三個聯隊を基幹として編成された。明治四年東京鎮台として創設、近衛師団と共に、明治政権の支柱となった歴史を持つ、いわゆる「頭号師団」である。従って歴代師団長には皇族あるいは第一級の経歴を持つ将軍を戴き、日露戦役には乃木將軍の下に旅順包圍戦を戦って多くの犠牲を出した。昭和十一年二月二十六日、いわゆる「二・二六事件」で歩兵第一聯隊、第三聯隊の一部が重臣暗殺という忌むべき事件を起し、以来満州に駐紮、極寒零下四〇度のソ連国境孫呉にあって、対ソ戦闘訓練にはげんでいた】259頁</p> <p>【このため第一師団の先頭の五十七聯隊は辛うじて、米軍より一日早くモントラの頂上を占拠することが出来たのであった】465頁</p>
昭和・平成	歩兵第五七連隊		山岡荘八『 小説太平洋戦争 』6 講談社	<p>【(*昭和一九年一月)三十日になって片岡中将の率いる第一師団が、マニラからレイテ決戦の第一陣として送り出された。この第一師団は東京の第一連隊、佐倉の第五十七連隊、甲府の第四十九連隊から成っている関東健児だ。このうち一部は、いわゆる二・二六事件の重臣暗殺事件に関係したといわれて、満州の黒電紅省に追いやられ、ずっと対ソ戦に備えて訓練されて来た精鋭で、装備も第一級の現役師団であった。この師団を送り出す時に、山下方面軍司令官は自身でわざわざマニラまで出向して行って見送った】174頁</p> <p>【第一師団が、その五十余日の間に支払った犠牲者の数を先にあげておくことにしよう。全員一万三千四百二十三名のうち、戦死没者驚くなけれ一万二千九百六十名！生存者はわずか四百六十名に過ぎなかったのである】234</p>
昭和・平成	歩兵第五七連隊		長嶺秀雄『 戦場学んだこと、伝えたいこと 』並木書房	<p>【私は、歩兵第五七連隊の第二大隊長として定員六六三人の部か、配属部隊を入ると九〇〇人に達する部下の大部分を失いながら、今生きている。部下の中隊長は配属部隊を含め八人が全滅、小隊長も一人を除き全員戦死した。現在の生存者は、申し訳ないが私以下一人である】67頁</p> <p>【昭和一九年一月一日、第一師団の輸送船団は、当時としては最高の海空支援を受けて、無事レイテ島西海岸オルモック港に到着、夜に入ると、船舶工兵の支援を受けて上陸した】85頁</p> <p>【第一線について見るならば、米軍砲兵三〇〇門に対して、わが第一師団の砲兵は三六門であるから一〇分の一であるといえるが、二門三門と逐次陣地進入するわが砲兵に対し、米軍は要点の火山にある観測所および米軍師団に二四機ある観測機によって射撃を誘導するため、少ない砲兵が次々につぶされて火力比は五〇対一から一〇〇対一というように差が広がってくるのである。したがって全戦場は米軍砲兵火力の支配下に入り、わが大隊の陣地など毎日数千発の砲弾を受ける状況にあった】111頁</p> <p>【歩兵第五七連隊のレイテ参加者は約二五〇〇人、そのうち約二〇〇〇人はリモンの戦闘で死傷し、昭和二〇年一月、軍命令によりセブ島に転進できた者は連隊長以下一七四人であった。そしてセブ島の作戦で六〇人を失い、帰還者は一八人である】136頁</p> <p>【第五七連隊の主力(第二大隊、第三大隊)は一月五日から遭遇戦に入り、逐次激戦に移行したのであるが、主力から遅れて上陸した第一大隊は、六日後に戦場に到着した】138頁</p> <p>【ここに『レイテ島捕虜新聞』という本がある。その中で、渡辺豊氏は「集まってくる捕虜集団は、どれも疲れきった敗残兵風だったが、玉兵団は違っていた。玉兵団は精鋭を誇った第一師団であった。彼らは堂々と隊列を組み、歩調をとって收容所の門を入ってきた」と書いている】204頁</p>
昭和・平成	歩兵第五七連隊		伊藤桂一『 生き残りの大隊長 』『 軍人たちの伝統 』所収 文藝春秋	<p>【日米戦争の天王山と目されたレイテ島の決戦は、昭和十九年十一月初旬から、十二月下旬にかけて行なわれた。日本軍はこれを「捷一号作戦」と呼称した。米軍は地上兵力十万を、十月二十日に上陸させている。日本軍は同じく地上兵力八万四千を動員し、うち七万九千五百六十一名の犠牲を出し、損害率実に九五パーセントである。日本軍にとっては、惨烈をきわめた敗戦となった。レイテ決戦は、日本軍が敗勢を持出しつつ、軍命によってセブ島に転進し、終戦まで、遊撃戦をつづけることになる。この、レイテ戦の主力兵団となった第一師団中の、歩兵第五十七連隊第二大隊長をつとめた長嶺秀雄少佐は、中、大隊長を通じて、負傷はしつつも、ただひとりの生き残りとなった】208頁</p>

昭和・平成	歩兵第五七連隊		神子清『われレイテに死せず』出版共同社	【「いまから、わが玉兵団の行動を説明する。敵の大部隊がレイテ島のタクロバンに上陸したのだ」ここで言葉を切った八尋中尉は、その地図の上の一点を指した。「そして目下、カリガラ湾に向けて進撃を続けている。わが玉兵団は、カリガラ湾の反対側の海岸、オルモック湾のオルモックに上陸して敵を迎え撃つのだ。いまでもなく、レイテの戦いこそ、戦局の大勢を決する天王山だ】11頁【「前進中の第三大隊は、圧倒的優勢な敵戦車隊の包囲を受けて殆ど全滅した。まことに残念である。したがってわが中隊は、現在の状態においては敵中に孤立したことになるが、しかし援軍は必ず来る…」】48頁
昭和・平成	歩兵第五七連隊		荒井努『ジャングルの死闘 グラム島玉砕の証言』	【昭和十九年二月二十一日、満州国孫呉駐屯の第一師団隷下の各第三大隊に、突如風雲を告げる動員令が下達された。歩兵第五十七連隊第三大隊(谷島大隊)は直ちに出勤準備を完了し、同月二十三日二十一時大隊長(陸軍大尉谷島武次)以下六百二十八名は、北満州の凍りつく酷寒零下四十度の氷雪を踏みしめながら、住みなれた想出の孫呉兵營を後に、名残なき別れを惜しみつつ、壮途に立った。何処に行くことも告げられることなく、不安の念を抱きながら、同月二十七日釜山港に到着した。ここにおいて、第一師団隷下の各第三大隊と第十一師団隷下の各第三大隊をもって、重松兵団(兵団長陸軍少将重松潔)が編成された】15頁【重松兵団の総兵力は五千百名、それに武器、弾薬、食糧、燃料等を積載し、三月二日釜山港を出発し、同月十二日東京湾木更津沖に投錨停泊した】17頁【東京湾では海が狭くなった程の堂々の大船団威容に、誰もが日本の国力はまだまだの感があった十五、六隻の輸送船団も、大洋に出た時は、あっちに一隻、こっちに一隻と各船は皆数軒乃至十数軒と離れ、船団を組んでいるとは到底見えなかった】19頁【われわれは不幸中の幸いであった。敵潜水艦に発見されることもなく三月二十二日、二十一時無事グアム島のアブラ港に上陸した】22頁【六月二十一日、五、六十機の大編隊機が、一挙にグアム島に襲いかかって来た】28頁【七月二十一日。敵は早朝の四時ころより一斉に艦砲射撃を開始するとともに、これと呼応した飛行機百機ぐらゐをもって、地上爆撃を執拗に繰返して来た】34頁【七時頃までには敵の艦載機三百機以上の大編隊をもって、わが番庄岬(パンギ)から明石間の海岸線に爆撃と地上掃射を繰り返し、わが陣地は徹底的壊滅の大打撃を蒙った。敵はその戦機を逸することなく、同時に正面上陸を敢行して来た】35頁【「歩兵第五十七連隊の谷島大隊は中小隊長全員戦死」の悲報が飛び込んできた。その四、五分後「谷島大隊は大部分が戦死」との続報があった。歩兵第五十七連隊の報告は僅かこの二報だけで断絶となった】49頁
昭和・平成	歩兵第五七連隊		伊藤桂一『螢の河』光人社	【ぼくは 鶏第三〇六四部隊の編成要員として、佐倉の歩兵第五十七連隊に召集された】6頁【ぼくらの部隊は、南京に兵団の司令部を置き、その周辺へ分駐した。連隊本部、大隊本部、中隊本部と次第に小さな町へ村へと散らばり、そこを基点として、場所によっては数名の分屯隊まで派遣した】11頁【中支那へ来てみて、実のところ、敵の少ないのに驚いた】12頁
昭和・平成	歩兵第五十七連隊	歩兵第五七連隊が昭和一年に満州に派遣された後、佐倉の當所には歩兵第五十七連隊が、さらにその後、東部六四部隊など、いくつかの部隊が編成されました	伊藤桂一『私の戦旅歌とその周辺』講談社	【私は、昭和十七年いっぱい内地で帰休し、出版社の編集見習のような仕事についたりしていたが、翌、十八年になって、召集令が来た。すでに、騎兵の時代は終わっていて、私の召集された部隊は、千葉県佐倉の、歩兵第五七聯隊の留守部隊だった。歩兵第五七聯隊は、第一師団の隷下部隊として、中国に出勤していたし、私たち新編成の部隊は、第六十一師団隷下の、歩兵第五十七聯隊である。別な呼称(兵団符号)では、鶏兵団の、鶏第三〇六四部隊である。新編成の場合には、隊号の上に「百」がついた】286頁
昭和・平成	歩兵第五七連隊		伊藤桂一『ラバウルの万能軍医』『警備隊の鯉のぼり』所収 光人社	【前線基地であったラバウルが、後方からの補給を絶たれ、孤立してしまつてからは、ラバウル周辺に布陣している各部隊は、いかに自活能力を発揮するか一に、その全力を傾けねばならなくなった。戦力よりも、頭の働きの先決になってきたのだ】20頁【第五十七連隊の小野見習士官は、木炭タールと石灰を主成分とする、タムシ薬をつくった】21頁
昭和・平成	歩兵第五十七連隊	歩兵第五七連隊が昭和一年に満州に派遣された後、佐倉の當所には歩兵第五十七連隊が、さらにその後、東部六四部隊など、いくつかの部隊が編成されました	伊藤桂一『戦旅の手帳』光人社	【私は取材の際、こちらの軍歴もあきらかにする。これはいわば一種の仁義を切るに似たもので、昭和十二年徴集、元騎兵十五、騎兵四十一、歩兵百五十七各連隊所屬、北中支派遣、実役六年十月月の伍長と説明】84頁【南京の近くの蕪湖という町には、祭兵団の歩兵第六十連隊が駐屯し、祭がビルマへ出たあとは鶏兵団の歩兵第五十七連隊が駐屯したが】86頁
昭和・平成	歩兵第五十七連隊	歩兵第五七連隊が昭和一年に満州に派遣された後、佐倉の當所には歩兵第五十七連隊が、さらにその後、東部六四部隊など、いくつかの部隊が編成されました	伊藤桂一『忘れがたみ』『搜索隊、山峡を行く』所収 光人社	【私たちの師団は、南京を中心にして、周辺に散らばって、駐屯警備の生活をつづけていたが、私は、昭和十八年から二十年にかけて、揚子江岸のB県一という大きな町の、部隊本部の糧秣班の仕事をしていた】94頁
昭和・平成	歩兵第五十七連隊	歩兵第五七連隊が昭和一年に満州に派遣された後、佐倉の當所には歩兵第五十七連隊が、さらにその後、東部六四部隊など、いくつかの部隊が編成されました	伊藤桂一『小説の書き方』講談社	【私が昭和十八年のはじめに、佐倉の歩兵第五十七聯隊に召集された時】31頁
昭和・平成	歩兵第五七連隊		青木玉『小石川の家』講談社	【親類の甥達は召集を受け、近所で毎日のように御用聞きに来ていた魚屋の息子も炭屋の跡取りも佐倉の連隊へ集められ外地へ行く先も知らされず送り出されて行った】124頁

昭和・平成	歩兵第五七連隊		岩川隆『人間の旗甦った血と涙の連隊旗』光文社	【「それほど、たいせつな式典ですか」「たいせつな・・・というか、来ずにはおられませんよ。戦場で、玉砕を覚悟で戦って、旗を二、三センチから十センチきざみに千切って、みんなで分けた。それを肌身離さず持って・・・死んだ者もいますよ。しかし、生き残った者は米軍の眼を誤魔化して帰国し、戦後は苦勞してばらばらになって生きながら、その切れ端だけはだいに持っていったんですからね。それが、ふたたび、つなぎ合わされて一つの旗になったですよ】20頁*歩兵第五七連隊の軍旗のこと
昭和・平成	東部六四部隊	歩兵第五七連隊が昭和十一年に満州に派遣された後、佐倉の営所には歩兵第五十七連隊が、さらにその後、東部六四部隊など、いくつかの部隊が編成されました	仁平光太郎『萬葉の桜』	【私の名は、相馬節子。旧制女学校二年のとき、それはすてきな兵隊さんと知り合いました】1頁 【アメリカ兵じゃないわよ。何を言ってるの貴女。大東亜戦争のまっさいちゅうよ。昭和十九年秋に佐倉の陸軍部隊に入った、二十才になったばかりの兵隊さんですよ。・・・いいこと？】2頁 【同級生の私たちは、この春、東部第六十四部隊にお貸した佐倉高女を、こっそり見に行ったんです】2頁 【佐倉生まれの私の口からでは、お国自慢としか聞こえないでしょうが、佐倉城址をめぐる四季の変化は鮮やかです。桜の花びらがお堀の水面に厚く重なる日々が過ぎると、部隊から練兵場、佐倉高女へと続く台地は、むせかえるような若葉につつまれます】48頁
昭和・平成	歩兵第五七連隊	歩兵第五七連隊歩兵第五十七連隊などの佐倉連隊歩兵第五七連隊が昭和十一年に満州に派遣された後、佐倉の営所には歩兵第五十七連隊が、さらにその後、東部六四部隊など、いくつかの部隊が編成されました	仁平光太郎『三十年目の手紙』	【佐倉で編成された我が部隊は、東京、甲府の部隊と合わせて、第一師団と称する】62頁 【この中には、自分のように二年間現役入隊した者もいるが、大半が訓練らしい訓練を受けていない。佐倉の原隊を出発する前に、数日間、各個教練、分隊戦闘などを教えたのみである。しかしながら、今さらそれを言っても仕方がない。聞くところによれば、第一師団すべてが同じような兵隊であるという】68頁
昭和・平成	歩兵第五七連隊		松本清張『遠い接近』松本清張全集』39 文藝春秋	【教育ノタメ召集・・・期間三カ月・・・入隊、歩兵第五十七聯隊(佐倉)・・・】86頁
昭和・平成	佐倉炭		青木玉『小石川の家』講談社	【火鉢の炭は、夕ご飯の始まる前に、佐倉の切り炭を埋け直して灰でしっかり囲う】20頁 *青木玉の祖父、幸田露伴は佐倉炭でお燗をしていた。